

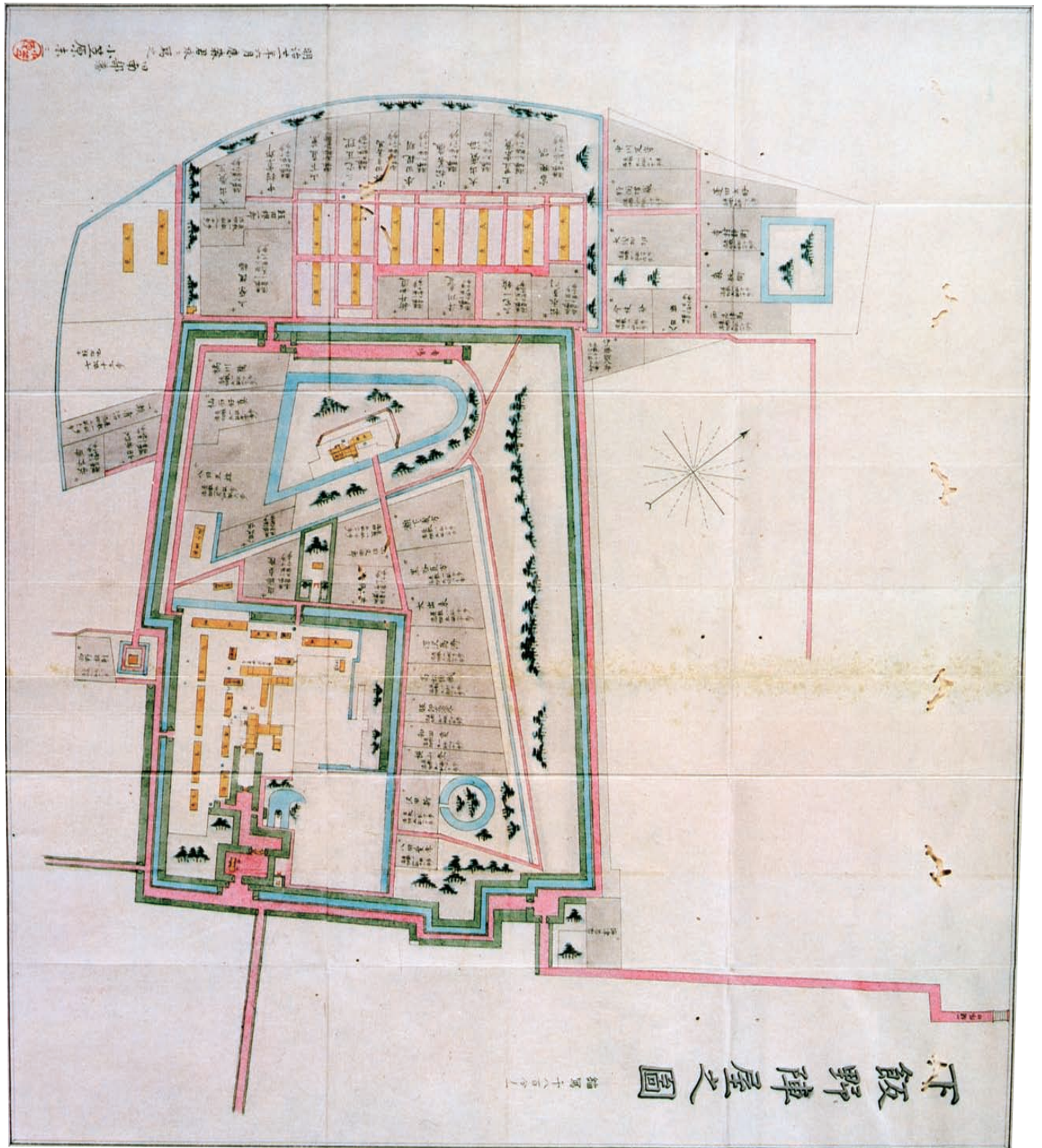
研究紀要 28

平成 25 年 3 月

公益財団法人 千葉県教育振興財団



明治初頭「生実藩陣屋見取図」(千葉県文書館蔵)



明治6年飯野陣屋繪図（富津市教育委員会蔵）

富津陣屋繪圖面

陣屋竹間貳百一分而
惣坪七千八百七拾五坪

藏
七
上

南

与場

東

西

北



富津陣屋繪圖面 (個人藏)



大多喜藩海防陣屋繪圖（個人藏）



州崎砲台



和田砲台・天面砲台



竹ヶ岡砲台



富津砲台



八幡崎砲台

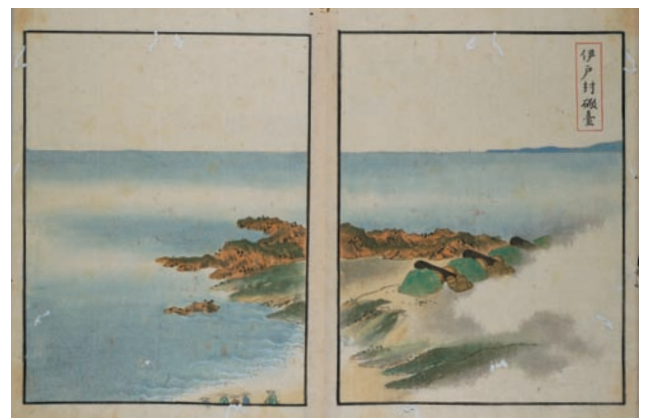


小浜砲台

海防陣屋絵図 (船橋市西図書館蔵)

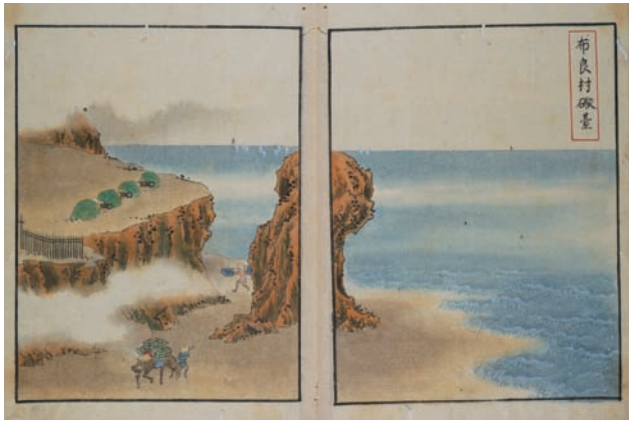


滝口砲台



伊豆砲台

近海見分之図 (神奈川県立歴史博物館蔵)



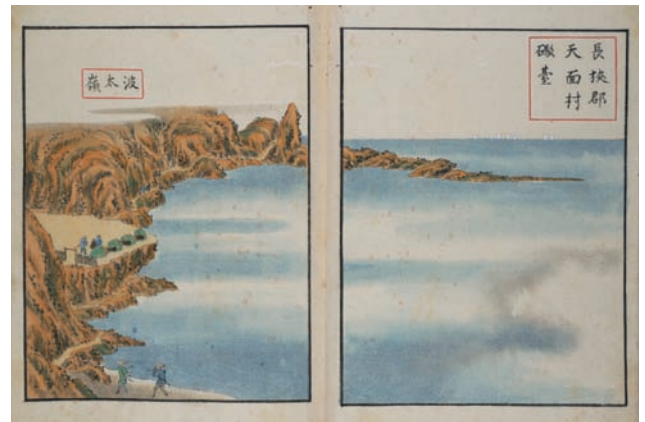
布良砲台



忽戸砲台



濱名太砲台



天面砲台



白子砲台



和田砲台



大坪砲台



富津砲台

発刊の辞

公益財団法人千葉県教育振興財団（平成17年9月1日付けで財団法人千葉県文化財センターから改称）は、昭和49年に設立以来、埋蔵文化財に関する数多くの調査、研究、普及活動を実施してまいりました。その成果は発掘調査報告書をはじめとする多数の刊行物に見られるとおりです。

研究活動につきましては、研究紀要の刊行をはじめ、埋蔵文化財調査に関連する独自の研究事業を行ってまいりました。昭和51年度に第1号を刊行しました研究紀要は、第1期から第3期の共通テーマによる調査・研究の成果として14冊を刊行いたしました。さらに、「創立10周年記念論集」、「創立20周年記念論集」として、研究紀要10号・16号を、県内出土青銅製品の生産と流通の実態を明らかにした「県内の青銅製品の集成と分析」を17号として、それぞれ刊行いたしました。続いて平成9年度から、古代寺院跡・中近世城館跡・貝塚・古墳等を対象とした「重要遺跡確認調査」の検討成果である「古代仏教遺跡の諸問題」ほか4冊（第18号～21号）を刊行しました。

以上の研究活動・実績から今までのまとめを兼ねて「各時代における諸問題」と題し、旧石器時代から中・近世までの時代を対象として共同研究を開始しました。平成13年度から、その成果を22号「尖頭器石器群の研究」、23号「房総における原始古代の農耕」、25号「房総における郡衙遺跡の諸問題」、26号「房総における縄文時代の非在地系土器について」、27号「古墳時代中期の房総－中期的要素の波及とその評価－」をそれぞれ刊行いたしました。

このたび、当シリーズの最後として、研究紀要28号「房総における近世陣屋」を第6冊目として刊行いたします。本書が考古学研究はもとより、埋蔵文化財調査の技術向上のための資料として、広く活用されることを期待してやみません。

平成25年3月

公益財団法人 千葉県教育振興財団
理事長 渡 邊 清 秋

はじめに

管理普及部長 加藤 修司

公益財団法人千葉県教育振興財団は、昭和49年に創設以来、埋蔵文化財の発掘調査及びこれに関する研究事業・普及事業を主な業務としています。

この間、緊急調査と学術調査によって数多くの遺跡を発掘調査し、刊行した調査報告書も700冊以上に達しています。さらに調査を通じて集積された膨大な資料の整理・検討から各時代・各分野の問題点の解明について積極的に取り組んできたところであります。

『研究紀要』は、各時代・各分野における文化・遺跡・遺構・遺物等の問題点を抽出し、これらの解明に向けた文献・遺構・遺物などの資料の収集・整理、そして論考を加えるための共同研究を通して、当財団職員の日頃の研究成果を社会に提示・還元するものであります。平成10年度からは第5期として「各時代における諸問題」という新しい主題による研究が開始され、22号以下でその成果を刊行しています。本号では、「房総における近世陣屋」と題し、本県における江戸時代の陣屋について検討を加えることとしました。

陣屋は城郭と並んで江戸時代のシンボリックな存在です。千葉県下においては、佐倉城・大多喜城などを始めとして5城（明治初年の4城を加えれば9城）の近世城郭があり、陣屋も約60か所ほど確認されました。日本三大陣屋の一つといわれる飯野陣屋はその代表的なものですが、城郭に比べて近世陣屋の知名度は高くないのが実状です。確かに、白壁が巡り白亜の天守を仰ぎ見るような景観は陣屋では見られず、せいぜい周囲に残る堀と土塁から陣屋とわかるのがほとんどといってよいでしょう。

そのためか、陣屋の研究は城郭に比べて概して遅れているのが現状です。江戸時代のことですから、初めはともかく、記録によって陣屋自体はある程度把握されているのですが、多くはその位置や範囲、存続年代など詳しいことがよく分かっていません。これは陣屋の保護・活用はもちろんのこと、開発に伴う発掘調査をするうえでも大きな障害となっています。そのため、先ず関係資料調査による数と位置の把握、範囲、当主、存続期間など、基礎的事項の調査から始めました。その結果、全体として約100近くの陣屋を確認することが出来ましたが、それに基づき現地踏査を行ったことで、その位置や範囲がかなり明らかになりました。この点は今後の研究のみならず、社会的要請にも応え得るデータを用意することが出来たのではないのでしょうか。

この成果に基づき、陣屋をその性格の違いから分類した結果、房総では大名陣屋・大名出張陣屋・旗本陣屋・海防陣屋、それに数は僅かですが、代官陣屋の5つに大きく分けることが出来ました。大名陣屋・大名出張陣屋・旗本陣屋の三つは房総の陣屋を構成する主要なものです。佐倉藩や関宿藩以外は小藩で、旗本領が多くを占めていた房総ならではの条件がもたらした結果でしょうか。幕府領経営のために設けられた代官陣屋が少ないのはその対極にあります。

幕末のペリーによる「黒船」来航は有名ですが、海路によって直接に江戸城下へ来航が可能なおもあって、実はそれ以前から幕府は江戸湾（現東京湾）の警備に着手しており、幕府の指示のもと、各藩が担当した地域に陣屋、台場が築かれています。陣屋には本陣が置かれ、藩士が駐屯し、台場には異国船に備えて番士と大小の大砲や銃が配置されたことから、本来両者は一体のものと考えられ、陣屋と台場をセッ

トとして扱った理由がここにあります。もちろんこの他に臨時の陣小屋なども造られたことがわかっていますが、富津から一宮を結ぶ線以南の配備状況からして、如何にその当時房総海辺が緊張した状況であったかを知ることが出来るのではないのでしょうか。

発掘調査は、飯野陣屋・生実陣屋・高岡陣屋・真武根陣屋・東条陣屋（大名陣屋）、富津陣屋（海防陣屋）等10数例ですが、この内、継続して調査されている飯野陣屋、現況が測量された真武根陣屋、中世在地領主屋敷地に重複して作られた東条陣屋、建物配置が絵図と一致した富津陣屋などは、第5章で調査成果を紹介しています。構造や遺構については、中・近世城郭との違いや当時の政治情勢の関係を一つの視点としています。出土遺物については、日常生活用品の陶磁器・屋根瓦などが中心ですが、陶磁器類の組み合わせ等から、家族を伴った藩士の生活についても検討しています。

とはいえ、近世陣屋研究者とのプロジェクト作業や絵図による陣屋内部の建物・築庭等の復元、現存建物（御門、長屋等）の建築学的調査など、陣屋研究を進めるうえでの課題も残しています。これらも含め、今後も学際的研究の一翼をなす所存です。

本書は、平成18年度から平成23年度の6か年を費やして実施してきた研究成果をまとめたものであります。今後の近世陣屋の研究に寄与することがあれば幸いです。

なお、研究ノートとして、当財団報告書第549集として刊行いたしました流山市思井堀ノ内遺跡の中世区画墓出土の副葬品について詳細調査報告をまとめ、地方に暮らす中世豪族の信仰の一端を紹介しています。

最後になりましたが、執筆にあたり、以下の各位に多大なる御指導・御協力を賜りましたことをここに御芳名を記し、深く感謝の意を表します。

〈協力機関〉（五十音順）

いすみ市教育委員会、一宮町教育委員会、印西市教育委員会、神奈川県立歴史博物館、鴨川市教育委員会、久留里城址資料館、佐倉市史編さん室、山武市教育委員会、館山市立博物館、成田市教育委員会、成田市下総郷土資料館、千葉県文書館、千葉県立中央図書館、千葉市史編さん室、千葉市立郷土博物館、南房総市教育委員会、富津市教育委員会、船橋市中央図書館、茂原市郷土資料館・美術館、海音寺

〈協力者〉（五十音順、敬称略）

宇野 幸、岡田晃司、小沢 洋、織本マサ子、小池康久、佐々武男、椎名荘治、津田芳男、鳥海文也、土佐博文、八田英夫、平山誠一、松本 勝、宮島千恵子、築瀬裕一、渡辺美代子

〈担当者〉

平成18～22年度 小高春雄、井上哲朗

〈基本的執筆分担〉

小高春雄 井上分を除く第1章～第4章、第6章

井上哲朗 第2章（真武根陣屋・東条陣屋の発掘調査成果）、第5章

大久保奈奈 研究ノート

目 次

房総における近世陣屋

発刊の辞

はじめに

第1章 房総の陣屋	1
第1節 陣屋とは	1
第2節 陣屋の種類と外観・構造	2
1 陣屋の種類	2
2 陣屋の外観・構造	4
第3節 研究略史	4
第2章 大名・旗本・代官陣屋	9
第1節 下総の陣屋	10
1. 飯沼陣屋 2. 三川陣屋 3. 太田陣屋 4. 小南陣屋 5. 上代陣屋 6. 小見川陣屋	
7. 堀川陣屋 8. 小笹陣屋 9. 飯田陣屋 10. 吉田陣屋 11. 飯笹陣屋 12. 多古陣屋	
13. 高岡陣屋 14. 大貫陣屋 15. 郡陣屋 16. 大堀陣屋 17. 岩戸陣屋 18. 青菅陣屋	
19. 生実陣屋 20. 曾我野陣屋 21. 栗原陣屋 22. 大森陣屋 23. 藤心陣屋・船戸陣屋	
24. 木野崎陣屋 25. 山崎陣屋 26. 加陣屋 27. 戸定陣屋 28. 小金陣屋・金ヶ作陣屋	
29. その他	
第2節 上総の陣屋	46
1. 折戸陣屋 2. 成東陣屋 3. 東金陣屋 4. 大網陣屋 5. 潤井戸陣屋 6. 八幡陣屋1	
7. 八幡陣屋2 8. 五井陣屋 9. 姉崎陣屋 10. 鶴牧陣屋 11. 内田陣屋 12. 一宮陣屋	
13. 中滝陣屋 14. 荻谷陣屋 15. 小佐部陣屋 16. 勝浦陣屋1 17. 勝浦陣屋2 18. 貝淵陣屋	
19. 真武根陣屋 20. 人見陣屋 21. 下湯江陣屋 22. 向郷陣屋 23. 三本松陣屋 24. 市場陣屋	
25. 飯野陣屋 26. 小久保陣屋 27. その他	
第3節 安房の陣屋	79
1. 勝山陣屋 2. 東条陣屋 3. 花房陣屋(城) 4. 御蔵陣屋 5. 船形陣屋	
6. 北条(鶴ヶ谷)陣屋 7. 北条陣屋 8. 館山陣屋 9. 長尾陣屋(城) 10. その他	
第3章 海防陣屋・台場	93
第1節 海防陣屋	94
1. 木戸陣屋 2. 亥鼻陣屋 3. 富津陣屋 4. 竹ヶ岡(百首)陣屋 5. 北条陣屋	
6. 波佐間陣屋	
第2節 海防台場・炮台	105
1. 銚子台場群 2. 一宮台場 3. 大多喜藩領台場群 4. 岩槻藩領台場群(上総国)	
5. 岩槻藩領台場群(安房国) 6. 富津台場 7. 竹ヶ岡台場 8. 七曲台場 9. 大坪山台場	
10. 大房崎台場 11. 州崎台場 12. 安房・朝夷両郡台場群 13. その他	

第4章 その他	126
第1節 番所	126
第2節 会所	126
第3節 郷蔵	127
第5章 発掘された陣屋	128
はじめに	128
第1節 高岡陣屋	128
第2節 真武根陣屋	131
第3節 飯野陣屋	135
第4節 東条陣屋	140
第5節 長尾陣屋	144
第6節 富津陣屋	146
おわりに	
第6章 房総陣屋研究の特質と課題	151
第1節 房総陣屋研究の特質	151
第2節 房総陣屋研究の課題	152
研究ノート 流山市思井堀之内遺跡中世墓副葬品詳細調査報告	155

挿図目次

第1図 久留里藩海防計画陣屋図	第16図 小笹陣屋の位置
第2図 大名・旗本陣屋の分布図	第17図 字殿屋敷周辺地籍図
第3図 飯沼陣屋の位置	第18図 飯田陣屋の位置
第4図 三川陣屋の位置	第19図 吉田陣屋の位置
第5図 三川陣屋跡	第20図 吉田陣屋の規模と範囲
第6図 太田陣屋の位置	第21図 飯笹陣屋の位置
第7図 太田陣屋見取図	第22図 多古陣屋の位置
第8図 小南陣屋の位置	第23図 高岡陣屋の位置
第9図 小南陣屋地籍図	第24図 高岡陣屋見取図
第10図 上代陣屋の位置	第25図 大貫陣屋の位置
第11図 桜井城跡現況図	第26図 郡陣屋の位置
第12図 小見川陣屋の位置	第27図 大堀陣屋の位置
第13図 小見川陣屋絵図	第28図 大堀陣屋跡検出状況
第14図 堀川陣屋の位置	第29図 岩戸陣屋の位置
第15図 堀川陣屋調査位置図	第30図 岩戸陣屋跡と調査区

- | | | | |
|------|---------------|-------|--------------|
| 第31図 | 青菅陣屋の位置 | 第68図 | 鶴牧陣屋の位置 |
| 第32図 | 青菅陣屋跡付近 | 第69図 | 鶴牧陣屋見取図 |
| 第33図 | 生実陣屋の位置 | 第70図 | 内田陣屋の位置 |
| 第34図 | 生実陣屋の堀断面図 | 第71図 | 一宮陣屋の位置 |
| 第35図 | 生実陣屋跡出土遺物 | 第72図 | 中滝陣屋の位置 |
| 第36図 | 曾我野陣屋の位置 | 第73図 | 中滝陣屋地籍図 |
| 第37図 | 栗原陣屋の位置 | 第74図 | 苅谷陣屋の位置 |
| 第38図 | 大森陣屋の位置 | 第75図 | 小佐部陣屋の位置 |
| 第39図 | 藤心陣屋の位置 | 第76図 | 小佐部陣屋跡旧状 |
| 第40図 | 船戸陣屋の位置 | 第77図 | 勝浦陣屋の位置 |
| 第41図 | 木野崎陣屋の位置 | 第78図 | 坂之上（内台）陣屋の位置 |
| 第42図 | 山崎陣屋の位置 | 第79図 | 坂之上陣屋跡見取図 |
| 第43図 | 堤台城址復元図 | 第80図 | 勝浦（墨名）陣屋の位置 |
| 第44図 | 加陣屋の位置 | 第81図 | 貝淵陣屋の位置 |
| 第45図 | 加陣屋調査範囲と周辺地形 | 第82図 | 真武根陣屋の位置 |
| 第46図 | 加陣屋検出遺構 | 第83図 | 真武根陣屋跡推定復元図 |
| 第47図 | 加陣屋検出建物跡 | 第84図 | 人見陣屋の位置 |
| 第48図 | 加陣屋出土遺物 | 第85図 | 下湯江陣屋の位置 |
| 第49図 | 加陣屋・県庁配置図 | 第86図 | 向郷陣屋の位置 |
| 第50図 | 戸定陣屋の位置 | 第87図 | 三本松陣屋の位置 |
| 第51図 | 小金陣屋の位置 | 第88図 | 市場陣屋の位置 |
| 第52図 | 金ヶ作陣屋の位置 | 第89図 | 飯野陣屋の位置 |
| 第53図 | 金ヶ作陣屋跡測量図 | 第90図 | 飯野陣屋跡全体図 |
| 第54図 | 折戸陣屋の位置 | 第91図 | 小久保陣屋の位置 |
| 第55図 | 折戸旧状 | 第92図 | 勝山陣屋の位置 |
| 第56図 | 成東陣屋の位置 | 第93図 | 東條陣屋の位置 |
| 第57図 | 東金陣屋の位置 | 第94図 | 花房陣屋（城）の位置 |
| 第58図 | 大網陣屋の位置 | 第95図 | 御蔵陣屋の位置 |
| 第59図 | 潤井戸陣屋の位置 | 第96図 | 船形陣屋の位置 |
| 第60図 | 八幡旧状 | 第97図 | 船形陣屋見取図 |
| 第61図 | 八幡陣屋の位置 | 第98図 | 北条（鶴ヶ谷）陣屋の位置 |
| 第62図 | 平成13年武道館北東調査区 | 第99図 | 北条（鶴ヶ谷）陣屋見取図 |
| 第63図 | 同左出土遺物（17世紀代） | 第100図 | 北条陣屋の位置 |
| 第64図 | 五井陣屋の位置 | 第101図 | 館山陣屋の位置 |
| 第65図 | 五井陣屋跡旧状 | 第102図 | 館山城跡と館山陣屋 |
| 第66図 | 姉崎陣屋の位置 | 第103図 | 長尾陣屋（城）の位置 |
| 第67図 | 姉崎旧状 | 第104図 | 長尾城分見図写 |

第105図	海防陣屋・台場の位置	第128図	布良台場・滝口台場の位置
第106図	木戸陣屋の位置	第129図	川名台場～忽戸台場の位置
第107図	木戸陣屋見取図	第130図	嶋戸倉台場の位置
第108図	亥鼻陣屋の位置	第131図	高岡陣屋跡発掘地点と周辺地形図
第109図	亥鼻城（陣屋）跡調査区（部分）	第132図	高岡陣屋跡調査区
第110図	亥鼻城（陣屋）跡19世紀代土坑出土遺物	第133図	高岡陣屋跡出土遺物
第111図	富津陣屋の位置	第134図	真武根陣屋跡南東部調査区全体図
第112図	竹ヶ岡（百首）陣屋の位置	第135図	真武根陣屋跡南東部トレンチ断面図
第113図	竹ヶ岡陣屋跡旧状	第136図	真武根陣屋跡出土遺物
第114図	北条陣屋の位置	第137図	飯野陣屋本丸跡調査区全体図・絵図
第115図	波佐間陣屋の位置	第138図	飯野陣屋二の丸跡調査区全体図
第116図	白子番所の位置	第139図	飯野陣屋二の丸跡出土遺物（1）
第117図	銚子台場群の位置	第140図	飯野陣屋二の丸跡出土遺物（2）
第118図	一宮台場の位置	第141図	西郷氏館跡（東条陣屋跡）発掘調査地点
第119図	大多喜藩領台場群の位置	第142図	西郷氏館跡遺構配置図
第120図	岩槻藩領台場群（上総国）の位置	第143図	西郷氏館跡出土近世遺物
第121図	岩槻藩領台場群（安房国）の位置	第144図	西郷氏館跡瀬戸・美濃組成グラフ
第122図	富津台場の位置	第145図	長尾陣屋跡確認調査トレンチ配置図
第123図	竹ヶ岡台場の位置	第146図	長尾陣屋跡遺構配置図
第124図	七曲台場の位置	第147図	富津陣屋跡調査区と周辺地形図
第125図	大坪山台場の位置	第148図	富津陣屋跡遺構配置図
第126図	大房崎台場の位置	第149図	富津陣屋跡出土遺物（1）
第127図	州崎台場の位置	第150図	富津陣屋跡出土遺物（2）

図版目次

図版1	大名陣屋・富津市飯野陣屋の堀	図版11	慈眼寺近景
図版2	高崎藩出張陣屋・銚子市飯沼陣屋跡石碑	図版12	西音寺近景
図版3	富津陣屋ろうそく石礎石列	図版13	飯田陣屋跡遠景
図版4	館山市文化財協会会報	図版14	吉田陣屋跡近景
図版5	飯沼陣屋跡解説	図版15	飯笹陣屋跡下段平場近景
図版6	高力直三郎の墓塔（仁玉不動院）	図版16	飯笹陣屋跡中段平場近景
図版7	太田陣屋跡近景	図版17	多古陣屋跡と天神社
図版8	陣屋小路近景	図版18	大和田妙印寺井上家墓所近景
図版9	上代陣屋字家中内遠景	図版19	陣屋内堀（左端裏門跡）
図版10	堀川陣屋跡近景	図版20	高岡陣屋御殿跡現状

- | | | | |
|------|------------------|------|-------------------------|
| 図版21 | 大貫陣屋跡近景 | 図版58 | 飯香岡八幡宮 |
| 図版22 | 大貫陣屋跡背後山上藤堂氏石碑 | 図版59 | 房総往還現状（仲町付近） |
| 図版23 | 郡陣屋跡遠景 | 図版60 | 守永寺から陣屋跡方面を見る |
| 図版24 | 円光寺近景 | 図版61 | 守永寺内松平定信母石塔 |
| 図版25 | 岩戸陣屋跡近景 | 図版62 | 内田陣屋跡遠景（東から） |
| 図版26 | 青管陣屋跡近景 | 図版63 | 陣屋跡西側土塁 |
| 図版27 | 生実陣屋跡近景 | 図版64 | 一宮陣屋跡現状 |
| 図版28 | 古城跡森川内膳正陣屋之絵図 | 図版65 | 観明寺表門 |
| 図版29 | 曾我野村字訳絵図 | 図版66 | 中滝陣屋跡近景 |
| 図版30 | 曾我野陣屋跡東側境界 | 図版67 | 苅谷陣屋跡遠景 |
| 図版31 | 曾我野陣屋跡北側道路現状 | 図版68 | 小佐部陣屋跡（小佐部区民センター）
近景 |
| 図版32 | 宝成寺参道 | 図版69 | 覚翁寺植村氏墓所 |
| 図版33 | 宝成寺成瀬家墓所近景 | 図版70 | 勝浦城跡新地ヶ台現状 |
| 図版34 | 陣屋背後から内部を見る | 図版71 | 坂之上陣屋跡近景 |
| 図版35 | 絵図にみられる大森陣屋 | 図版72 | 勝浦商工会館付近近景 |
| 図版36 | 藤心陣屋跡近景 | 図版73 | 勝浦小学校現状 |
| 図版37 | 木野崎陣屋跡遠景 | 図版74 | 貝淵藩陣屋跡近景 |
| 図版38 | 陣屋跡近景（奥の民家が屋号城山） | 図版75 | 真武根陣屋跡現状 |
| 図版39 | 海福寺近景 | 図版76 | 真武根陣屋跡石碑と解説 |
| 図版40 | 岡部長盛母石塔 | 図版77 | 人見陣屋跡近景 |
| 図版41 | 山崎陣屋跡遠景 | 図版78 | 正珊寺小笠原家墓所 |
| 図版42 | 海福寺岡部長寛墓塔 | 図版79 | 最勝福寺赤松氏置夫妻石塔 |
| 図版43 | 加陣屋跡現状 | 図版80 | 下湯江陣屋跡内部近景 |
| 図版44 | 戸定陣屋跡遠景 | 図版81 | 下湯江陣屋跡北側段差 |
| 図版45 | 松竜寺高木氏石塔 | 図版82 | 向郷陣屋跡近景 |
| 図版46 | 小金陣屋跡現状 | 図版83 | 三本松陣屋土塁跡 |
| 図版47 | 金ヶ作陣屋跡碑 | 図版84 | 三本松陣屋跡遠景 |
| 図版48 | 新福寺堀直重石塔 | 図版85 | 市場陣屋跡近景 |
| 図版49 | 本土寺秋山氏墓所 | 図版86 | 妙喜寺裏山曾根氏墓所 |
| 図版50 | 三川福蔵寺近景 | 図版87 | 小久保藩庁跡近景 |
| 図版51 | 折戸陣屋跡遠景 | 図版88 | 小久保陣屋記念碑 |
| 図版52 | 成東陣屋跡近景 | 図版89 | 慈広寺近景 |
| 図版53 | 成東陣屋部分 | 図版90 | 正法寺近景（奥に関口氏石塔） |
| 図版54 | 東金陣屋跡近景 | 図版91 | 勝山陣屋跡近景（背後中腹から） |
| 図版55 | 大網陣屋比定地（大網小学校校地） | 図版92 | 東条陣屋跡近景 |
| 図版56 | 蓮照寺三浦氏石塔 | 図版93 | 永明寺西郷氏家臣石塔群 |
| 図版57 | 潤井戸陣屋跡近景 | | |

- 図版94 多聞寺西郷正員母石塔
 図版95 荻原台遠景
 図版96 滝口神社近景
 図版97 御蔵陣屋近景
 図版98 智蔵寺三枝氏石塔
 図版99 船形陣屋跡遠景
 図版100 鶴ヶ谷陣屋南東番所跡近景
 図版101 鶴ヶ谷陣屋藩庁跡近景
 図版102 北条陣屋跡現状
 図版103 館山陣屋跡近景
 図版104 長尾陣屋跡現状
 図版105 長尾陣屋北西馬場跡現状
 図版106 前原陣屋跡（字蔵之台）
 図版107 藤井陣屋跡近景
 図版108 木戸陣屋跡遠景（栗山川対岸から）
 図版109 木戸陣屋移築長屋門
 図版110 木戸陣屋本陣跡近景
 図版111 栗山川河口と木戸浜
 図版112 富津村絵図先端台場部分
 図版113 富津陣屋絵図面
 図版114 竹ヶ岡陣屋跡遠景（西から）
 図版115 竹ヶ岡陣屋跡付近から台場方面を望む
 図版116 北条陣屋前現状
 図版117 波佐間陣屋跡近景
 図版118 白子遠見台から太平洋を望む
 図版119 千人塚台場跡
 図版120 川口台場跡
 図版121 外川台場跡遠景
 図版122 名洗台場跡
 図版123 長崎台場跡
 図版124 一宮台場跡近景
 図版125 一宮台場石碑
 図版126 八幡台遠見番所跡現状
 図版127 魚見台遠見番所跡土塁
 図版128 荒崎台場跡遠景
 図版129 船谷台場跡近景
 図版130 新官台場跡近景
 図版131 勝浦台場跡現状
 図版132 砂子浦台場跡遠景
 図版133 興津弁天岬台場跡付近遠景
 図版134 天津台場跡近景
 図版135 浜荻台場跡近景
 図版136 前原台場跡遠景
 図版137 浜波太台場跡遠景
 図版138 天面台場跡遠景
 図版139 和田台場跡近景
 図版140 「周准郡富津炮台狼煙図」
 図版141 「上総富津炮台会津持」
 図版142 富津出洲台場跡近景
 図版143 百首台場跡遠景（北から）
 図版144 石津浜台場跡石垣
 図版145 十二天の鼻台場跡近景
 図版146 七曲台場跡
 図版147 七曲台場跡から横須賀方面を見る
 図版148 大坪山台場跡現状（左側は東京湾観音）
 図版149 大坪山から七曲山を望む
 図版150 大房岬台場跡最上段近景
 図版151 「大房御台場図」
 図版152 洲崎台場跡遠景
 図版153 伊戸台場跡近景
 図版154 布良台場跡近景
 図版155 滝口台場跡近景
 図版156 忽戸台場跡近景
 図版157 白子台場跡近景
 図版158 長野田番所南側峠切通し道
 図版159 黒塚番所跡近景
 図版160 鴨川市嶺岡牧八丁陣屋跡現況
 図版161 房総最大の台場大房岬（右側江戸湾口）
 図版162 野手円長寺押田家墓所
 図版163 大多喜藩領荒崎台場・遠見台絵図部分
 図版164 大須賀家近景
 （現加曾利貝塚博物館敷地内）

第1章 房総の陣屋

第1節 陣屋とは

陣屋という呼称は平安時代からあるが、ここで扱う近世の陣屋とは中世に於ける臨時の陣営を指す言葉から発展して、その設置主体や目的から具体的な内容を指すことが普通である。例えば、関東地方では江戸に幕府が置かれ、主にその近郊に旗本が配置されたが、大身旗本では江戸屋敷の他に知行所支配のため現地に役所を設けることがあった（旗本陣屋）。6,000石の寄合旗本であった久松松平氏の多古町飯笹陣屋がその好例である。

また、一般的に1万石以上を大名とみて、即城持ち大名とする見方があるが、1～2万石程度の場合、城主に封じられればともかく、そうでない場合は領地の居館は城ではなく、陣屋ないし居所（大名陣屋：因みに幕末時は全国で約120か所）と称された。これは元和廃城令後は新築はもちろん再築も厳しく規制されたため、増加した小身大名に対応出来なかったという事情があり、それ故城主格という待遇も生じたが、江戸時代という時間幅のなかで、城郭の存在意義の変化（当主の体面上の差はあったが）もあったに違いない。

この他、大名や大身旗本がその居城ないし陣屋から遠く離れた飛地領支配のために設けた役所も陣屋と呼ばれた（出張陣屋）。上野国高崎藩の飯沼陣屋や武蔵国川越藩の三本松陣屋など、他国の大名による場合がほとんどながら、希に内陸の大多喜藩が海付領（伊南領）支配のために設けた小佐部陣屋のような例もあった。臨時のものとしては、幕末の海防陣屋がある。房総の場合、江戸の湾口を抱えているのと、長い海岸線を有していることもあって、要所に海防を担当した各藩による陣屋が作られている。このように、一口に陣屋とはいっても、その性格は多様である。ではこれを別な側面から見てみよう。

一般的に、陣屋の場合、城郭に付きものの深い堀や土塁、また、櫓等の建築物が無く、むしろ役所ないし屋敷地というイメージがあろう。事実、大名出張陣屋と旗本陣屋の多くはそうである。しかし、小身大名の居城・陣屋は必ずしもその呼称と内容が一致しない。俗に日本三陣屋の一つといわれる飯野陣屋は約40,000坪の面積を有し、大きく内郭と外郭からなり、3か所の門構えに屈曲した塁線、さらに外郭は惣濠で囲まれていた。17,000石という格や慶安元（1648）年という築城年代（但し諸説有り）、ま



図版1 大名陣屋・富津市飯野陣屋の堀

た、房総という地域性からすれば城郭としても不都合ではない。しかし、それはあくまでも保科氏の陣屋であった。これに対して、貞享元（1684）年、30年以上も廃城となっていた佐貫城の場合には、阿部氏16,000石の移封に当たり古城が取り立てられた。その届けによれば、本丸・二の丸間の空堀を除いては、堀や侍屋敷を元の如く復元したいというもので、要するに城としての体裁を整えたという側面はあるが、城郭であった。一方、文政10（1827）年に城主格となった若年寄水野忠韶（15,000石）は移封に伴い、安

房国北条から新たに上総国椎津村に城地を拝領したが、その内容や外観は陣屋そのもの（鶴牧陣屋）であった。このように、1～数万石クラスの居城・陣屋は築城年代ともからみ、その呼称と内容は必ずしも整合しないのである。これは、幕府が城主（城持ち）、城主格、無城（陣屋）という格付けを重要役職の任免や官位の叙任・江戸城内の伺候席と併せ、大名統制の手段として使った一面もあろう。

これに対して、幕末の海防陣屋は明確な目的意識の元に建設されている。中枢に当たる本陣、藩士たちを収容する長屋と武器蔵、それに倉庫などとわかりやすい。これに海辺の台場がセットになりそこにも番士が駐屯する。これらの他に房総にはほとんどない代官陣屋というタイプもあるが（後述）、こういう様々な陣屋があることと、小身大名の城郭と陣屋を区別することにそう大きな意味はないということを先ず述べておきたい。

第2節 陣屋の種類と外観・構造

1 陣屋の種類

既に大まかな陣屋の種類をあげておいたが、更にこれを房総という歴史的環境のなかで詳しくみてみよう。その当時一大々名であった徳川氏は江戸に入って、早急に新領国における家臣の知行割りに取りかかったが、その時点では安房に里見氏、常陸に佐竹氏という有力な大名が存在しており（茨城県側の下総国内でも小勢力が盤踞）、それへの対処が求められた。里見氏に対する大多喜（本多氏）・久留里（大須賀氏）・佐貫（内藤氏）、佐竹氏に対する網戸（木曾氏）・上代（後小見川：松平氏）・矢作（後岩ヶ崎：鳥居氏）・臼井（酒井氏）各城へ譜代の武将を配置した。ちなみに、慶長5年の関ヶ原前哨戦となった伏見城籠城の守将3名が何れもこの中に含まれている。信に足る諸将が選ばれたのである。その一方、その間（上総～下総）には万石以上が置かれることはあったが、多くは中小の知行取り家臣層で占められた。関ヶ原戦後、佐竹氏が秋田へ移され、戦後処理も含め万石以上の家臣層は加増されて房総を去ったが、上総3城は新たに大名となった土屋氏ほかが入って維持された。この関ヶ原後の在地体制は以後何度かの再編（地方直し）を経るもののその後の基本的な枠組みとなった。

この間の実態は未だよくわかっていないが、中小家臣団は知行所に屋敷を構えた（居屋敷）。それは彼ら一族の墓所が在地に見られることから明らかで、寛永期に入って江戸に屋敷を移すまでそこは知行所支配（地頭役所）も兼ねた。通常領地の一つ（分散した所領のなかの最大給付地）に設けた居屋敷が陣屋となるが、小身の場合は、単なる屋敷地として見過ごされており、これは今後の課題といえる。今回はこの中小家臣団の初期陣屋についても把握出来たものは対象に加えている。しかし、江戸時代を通してみると、寄合席に列し且つ儀式典礼の際などにも一つの基準とされた3,000石以上が通常在所に陣屋を有しており、これを便宜上〈旗本陣屋〉と呼んでおく。

次に、前節でもふれた10,000石から30,000石に満たないクラスの小身大名の場合の陣屋地であるが、10,000一寸の場合は例外なく陣屋である。もちろん、20,000石を前後する辺りでは既述したような事例もあるが、房総では通常陣屋といえばこのタイプをさす。しかし、それでは他と区別が付かないので、ここでは〈大名陣屋〉と呼んでおこう。この種陣屋も、当初から陣屋と呼んでいたかどうかは不明で、とりわけ前代の城郭を居所とした例が問題となる。例えば天正19年に武蔵忍から上代郷に入った松平家忠は、椿湖湖畔の桜井城を在所としたとされるが、そこが何と呼ばれていたかは一つのポイントとなろう（この点「家忠日記」には単に上代とのみある）。

明治初頭に房総に生まれた諸藩にもふれておかねばならない。明治元年、徳川氏が駿河・遠江へ70万石を以て移ったのに伴い、押し出されるようにそこに居た諸大名が房総にも入ってきた。鶴舞藩（当初長南）69,000石を筆頭に、松尾藩（当初芝山：53,300石）、菊間藩（50,000石）、長尾藩（40,000石）、花房藩（35,000石）等で、何れも城持ち大名であった。これら諸藩は実際に築城工事を起こしたものの、多くは普請途上で、再度の移転を余儀なくされ



図版2 高崎藩出張陣屋・銚子市飯沼陣屋跡石碑

た例（長尾藩：安房国長尾→同北条）もある。陣屋として紹介される場合も多いが、いわば時世（松尾藩では稜堡式の城郭）ということに加え、未完成に終わったという事情もあろう。そのため本書では省いたが、長尾と花房については取り上げた。それは、長尾の場合、陣屋構えということに加え、発掘調査の成果もあるからで、一方、花房は当初横渚を仮陣屋としたという事情もある。

大名出張陣屋については既にふれたところながら、房総においては他国といっても関東諸大名（上野・武蔵）の飛地支配が多いが、津藩や佐賀藩等の畿内・西国大名、また、福島藩のような奥州の大名がある（後者は転封後の結果）。この種陣屋はその支配地の成立事情やその後の経緯等まちまちで、ために位置が定かでない例もある。加えて藩領ということもあり、それは当然陣屋の規模や内容にも反映されたことと思われる。大森陣屋稲葉氏のように佐倉に居たものが転封により山城国に移った（淀藩）が、その領地の一部が残されたケース、継嗣無く収公されたケース（栗原陣屋）、領地が移され消滅したケース（郡陣屋）、また、岩槻藩のように領地が上総のみならず安房にも延びている場合は、さらに出張役所が設けられている（前原陣屋）。

幕府領はもちろん房総にも存在した。但し、関東幕領は江戸役所に於いて10名前後の代官による分割支配が行われたため、他地域のような幕府代官陣屋は存在しない。もちろん、江戸後期には北関東に代官所が設けられたりしたが、房総の場合、関東幕領約100万石のうち、その約1割強に過ぎなかったという事情もあろう。この点、幕末の布佐陣屋や明治初頭の加村役所のような場合は特殊な事例といってよい。また、幕政初期の状況については不明な点も多く、今後の課題といえる（第6章後述）。その一方、房総固有の幕領ともいべき馬牧（小金・佐倉・嶺岡）の管理は一部を野馬奉行綿貫氏が世襲し、他を馬預りなどの役人が担当した。前者の役宅を小金陣屋（御厩役所）と呼び、後者の役所は小金原の金ヶ作に置かれた（一部は佐倉藩担当）。また、遠く離れた嶺岡牧には牧士の会所である八丁陣屋があった。

寛政期以降、相次ぐ外国船の来航に危機意識をもった幕府は、江戸の喉元に当たる江戸（東京）湾の防備に乗り出した。文化8（1811）年の白河藩竹ヶ岡陣屋設置以来、内房要地では新たに海防を担当した大藩によって海防陣屋が築かれた。一方、外房地域では当地を領する各藩に持場が割り振られ、陣屋または台場が設置された。外国からの脅威が海路船によって可能な以上、海辺に作られたのは当然として、持場の岬などに設置された台場や遠見所を管轄した。それゆえ、陣屋と台場は一体となる存在で、本書に台場

を加えた理由がそこにある。

2 陣屋の外観と構造

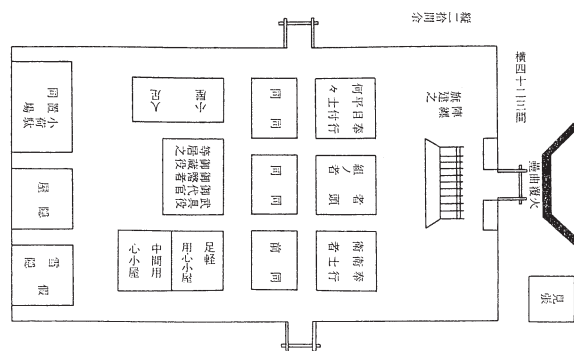
既にみたように一口に陣屋といっても多様である以上、その外観や構造も一様ではない。その詳細は各陣屋の項に譲るとして、ここでは大まかな理解に資するという観点から述べておきたい。

陣屋と対比されるのは城郭である。城郭それも近世といえば石垣天端から高櫓と白壁の塀が建つ城郭を思い浮かべるかもしれないが、そんな城は房総には無く、中世以来の土塁要所に簡素な櫓と土塀が備わっているにすぎない。もちろんまともな天守などなく、いわゆる御三階櫓が佐倉城や関宿城、久留里城にみられたにすぎない。但し、これは単純に未発達というのではなく、中世以来の伝統という側面が強く、この地域性は近世になっても受け継がれている。それゆえ、城櫓の失われた現在では果たしてどこが違うのか判断に苦しむこともあろう。

しかし、この点は陣屋の種類ごとに考えてみることで理解される。既述したように城郭との判別上問題となるのは小身大名（希に大身旗本）で、それ以下は濠と土塁が巡っていてもその規模の差は明らかである。加えて、その平面形態も長方形のいわば単郭がほとんどで、僅かに門構えなどが民家に移築されて往時の様子を偲ぶ程度である。一概には言えないが、深い堀と高土塁（石垣）それに櫓や土塀の存在が両者判別の目安と言えるかもしれない。旗本の場合はその家禄の大きさに軍役が比例し、それに役職が加わって屋敷地の大きさや建物の規模・内装・門構えまである程度決まっていた。それゆえ、それは陣屋に於いても踏襲されたであろうが、その詳細な検討はこれからの課題である。

これに対して、大名出張陣屋や代官陣屋はその内部空間において違いがある。というのは、そこには当主の御殿空間（いわゆる奥向から御庭まで）がなく、代官（目付）役宅・事務棟である本陣と手代以下の長屋、それに各種蔵が附属したが、地方（民政）のみならず公事方つまり警察・裁判も一部担当したので、牢獄や白州もあった。野馬方の場合などは馬小屋が付いたが、これは特異な例である。

海防陣屋は既述したような特性ゆえ、駐屯する藩士のための長屋群と鉄炮等火器の調練場や武器・武具・火薬等を入れる武器蔵があった。担当する藩によって人数等異なるので、内部の様子は時期によっても異なる可能性があり、事実富津陣屋のように発掘成果等も含め検討された事例もある。台場は砲台と呼ばれることもあるが、富津、竹ヶ岡、大房、洲崎のような恒久的なものから、上総～安房に至る外海沿岸の臨時的なものがある。前者は砲燄、土塀、陣所、遠見台等を備える一方、後者は浜辺ないし岬突端に砲列を敷いたものであり、現地を観察しても遺構らしきものは確認出来ない。



第1図 久留里藩海防陣屋計画図（『久留里藩制一斑』）

第3節 研究略史

明治初頭における房総の城は5か所（房総新藩居城を含めれば10か所）、一方、幕末の陣屋は捉え方にもよるが約45か所であった。幕藩体制が崩壊し、明治新政府が発足するや、城郭・陣屋内の門・櫓・御殿

等建造物は取り壊され、入札を以て売却された。新たに軍隊の営所、学校、役所として使われる場合も含め、前代の遺産を保存しようとする動きや記録したりという試みは房総ではみられなかった。

最初に陣屋が採り上げられたのは地誌であり、その嚆矢が明治10年の『上総國誌』¹⁾である。そこには陣屋という項が設けられ、8か所の当主・歴史等が簡略に記されている。次いで、明治22年刊の『上総町郷誌』²⁾はその性格上、各町村を説明する事項の一つという面はあるが、知られている陣屋(23か所)を一通り採録しており、加えて現在では知り得ない情報も含まれているなど、旧上総国内の陣屋研究上先ず繙くべき文献といってよい。その後、大正～昭和期にかけて刊行された上総5郡の郡誌・郷土誌がこれに拠ったことは言うまでもない。一方、旧安房国内では明治19年の『大日本国誌』安房第三卷³⁾、同41年の『安房誌』⁴⁾のように地域色濃い郷土誌が生まれており、陣屋についてもその多くが紹介された。

一方、大正元年・同2年の『印旛郡誌』から始まり、以後昭和2年の君津郡誌を最後に各郡誌⁵⁾が刊行され、城郭・陣屋も収載されたが、大正8年の『稿本千葉縣誌』⁶⁾は県内全域の陣屋(52か所)を網羅したという点で特筆される。これら、郡誌・県誌はその後の房総城郭・陣屋の基本的文献となった。

戦後は昭和20年代後半から城郭紹介・写真集の出版がみられるようになり、それに伴うかたちで陣屋も紹介された。しかし、それはあくまでも付随する扱いであり、紹介された陣屋もほぼ大名陣屋に限定されたものであった。「探訪」上の理由もあったのだろう。この点、昭和42年の『日本城郭全集』3茨城・群馬・千葉⁷⁾においても、旧県史・郡誌を踏襲する内容といってよい。その一方、この前後から、県内市町村史が編まれ、同時に城郭関係論文が目立つようになった。昭和45・46年度の全県的な中近世遺跡調査⁸⁾は分布地図作製も兼ねており、既知のものとはいえ、位置も含めて把握(64か所)された意義は大きい。その後、昭和50年代の『日本城郭大系』千葉・神奈川⁹⁾では陣屋の現状が報告され、また、平成2年度～7年度にかけては県教委による中近世城館跡詳細分布調査が行われた¹⁰⁾。後者は研究者もまじえた調査・報告であり、中世城館において大幅な増加が見られたものの、陣屋については現状維持に留まっている。総じて、陣屋の定義とも関連するが、究極的にはこの間の陣屋に対する研究意識と符合するものであったといえる。

城郭の発掘調査報告が見られるようになったのも40年代後半であったが、それは意図的なものではなく、破壊を前提とした開発事業に起因しており(埋蔵文化財の記録保存)、そういう意味では位置や範囲また知名度の低い陣屋は最初から対象外となった。房総における陣屋の発掘例が飯野陣屋に始まり、今日11次の調査例¹¹⁾を数えているのは象徴的である。それでも、その後の調査成果にはみるべきものも多い。次に幾つかの例をあげておく。

昭和63～64年度にかけて行われた生実陣屋(森川氏陣屋跡)は陣屋南端の堀とその表門南側(現市道部分)にかけて調査が行われた。陣屋が中世の曲輪の一つを改造したものであることや、大量の近世陶磁器の出土などが注目されるが、天正18年に入った西郷氏との関連は不明のままで、且つその概要¹²⁾が報告されたにすぎない。房総海防陣屋の中核となった富津陣屋は平成9年にその北西部が調査され、長屋や厩の地業跡が確認され、絵図と良く符合することや地質に合った特異な地業のあり方が確認された¹³⁾。この



図版3 富津陣屋ろうそく石礎石列

成果はそれ以前から幕末の海防研究を進めていた筑紫敏夫氏によって活用され、海防陣屋の研究を大きく深化させた。請西藩10,000石の真武根陣屋¹⁴⁾は一部発掘調査と遺存部の測量調査が行われ、その成果も直ぐに報告された。複雑な土塁配置が示すものは今後の課題ながら、ともかく現況を記録することは今後の研究や行政的対応の出発点と言えるのではなかろうか。絵図との対比で効果的だったのは、最後の城郭ともいべき長尾陣屋¹⁵⁾である。限られた存続期間（明治2年～同3年）での普請痕跡が窺われる点で希なケースといえるが、類似例を考えるうえで参考となるであろう。なお、別な視点で注目せざるを得ない事例に酒々井町墨古沢遺跡がある。この遺跡は城とも陣屋とも把握されていなかったが、中世～近世初めにわたる陶磁器を中心とする多量の遺物が出土した。遺跡のあり方は溝や道で画された区画内に掘立柱建物、地下式坑、粘土貼土坑、楕円形・方形竪穴遺構、火葬施設などが営まれるものであった。各区画を一つの屋敷とし、全体を集落、そのなかの規模の大きな主屋となる屋敷主を上層農民とする。さらに、この「村落」は「都市的な場」とかんがえられなくもない、とする¹⁶⁾。その当否はともかく、ここまでは発掘調査報告では一般的な報告事項といえる。しかし、その性格を特定する作業は充分とはいえない。天正18年、松平伊昌は佐倉領内9か村2,000石を与えられたが、その筆頭にすミ郷（墨郷）次いでふっそう村（古沢村）があげられている。伊昌は天正20年に銚子の飯沼へ移るので約2年間当地を居所とした可能性が高い。とはいえ、検出された遺構と遺物がそれにどう対応するのか、この辺りに考古学の課題がある。

房総へ入った中小家臣団については和泉清司氏を始めとした研究¹⁷⁾がある。彼らの屋敷が館に相当するとすれば、それは農民層の屋敷とどう区別され、具体的な調査事例に比定できるのであろうか。重い課題を突き付けていると見るべきである。何れにせよ、該期の遺跡の性格をどう評価するかは初期の陣屋との対比上必要な作業であろう。

一方、陣屋そのものを近世史から正面に扱った論功は残念ながら無いに等しい。とはいえ、これは研究が停滞していた訳ではなく、例えば昭和30年代以降、旗本に関わる研究事例も多い。ただそれらは幕藩制と旗本または旗本領乃至その知行所支配に関わる研究が主で、そこで果たした陣屋そのものに及ぶものではない¹⁸⁾。近世史の研究者にとって、陣屋の研究は一部代官陣屋¹⁹⁾、それも陣屋の設置・改廃過程と代官の質的性格の変化などを除き、ほとんど採り上げるべき題材とならなかったのである。それでは、建築や考古学の分野で積極的なアプローチがあったかという点、そもそも建造物として残された事例が少なく（主に絵図による検討）、また、一部を除き調査対象になっていない現実があった。この一部が「城郭・陣屋、馬土手」であるといえれば矛盾するかもしれないが、有名な大名陣屋を除きその位置や範囲また歴史が不明瞭であったという実態が調査に至る阻害要因となっていたのである。県外ではあるが一例を示そう。信濃つまり長野県には代官陣屋が多い。長野県史跡に指定されている伊那市飯島陣屋は復元整備のためのレポートという側面はあるが、様々な資料を駆使して、復原案を提示している。その結論が、「伊奈谷の上級農民や街道の本陣などに用いられた本棟作りの形式を採用…（中略）…陣屋建築として定形があるのではなく、その地域の大規模民家の形式のなかに、役所・玄関・広間・書院・書役部屋などを当てはめていった」と推定するものであった²⁰⁾。房総に於ける大名飛地領が陣屋の地方役人として現地有力名主層が登用され、彼らによって担われた事実は既に指摘されている。それは旗本知行所支配も同様ながら、小身旗本の場合、有力名主の邸宅がその現地役所を兼ねたとし、房総の現存例をもとに、式台から始まり座敷飾りを持つ奥の間を有する書院造部分がそれに該当するのではないかとする見解がある²¹⁾。一つの方法とはいえ、こういう視点が求められているのではなかろうか。

それに対して、海防陣屋の研究は昭和50年代以降大きく進展した。日本全体を扱ってはいるが、とりわけ江戸湾の警備状況、陣屋・台場について詳細にふれた原 剛氏の研究²²⁾や個別房総を扱った事例²³⁾もあったが、近年でも多角的な研究があった²⁴⁾。佐倉藩が築いた亥鼻陣屋・木戸陣屋、大藩が交代で担当した内房各地の陣屋（富津・竹ヶ岡・北条・波佐間等）、岩槻藩・大多喜藩等の台場群など、それらは佐倉市史・富津市史・勝浦市史・夷隅町史²⁵⁾などの市町村史で関係する資料を含め詳しく採り上げられた。また、筑紫敏夫等個人による研究²⁶⁾によって、その設置から廃止に至る過程の大枠が明らかになった。昨今、戦争遺跡として房総の要塞地帯にもひかりが当てられるようになったが²⁷⁾、近世台場群と近代要塞施設は諸所で重複する。時代を越えた立地の共通性は江戸から東京へという変貌のなかでも検討されるはずである。なお、富津沖の第三台場は幕末～明治期にわたって築造された台場・要塞であるが、その撤去に伴い、土木工学等考古学手法とは異なった多様な調査が行われた²⁸⁾。蘭学ないし所謂お雇い外国人技術者等西洋の技術導入が計られている以上、それに見合った報告も求められるであろう。

地元根拠した研究も紹介しておかねばならない。安房長尾陣屋・花房陣屋・北条陣屋・勝山陣屋等、上総飯野陣屋・三本松陣屋等、それらは館山市文化財保護協会会報を始め地元の郷土史²⁹⁾に掲載されたが、地元故の情報も含め、絵図や見取図、古写真等も含めた内容となっており、今後の研究にも資すると思われる。

房総は江戸という一大近世遺跡に隣接する。そこでの発掘対象が江戸城や大名屋敷、墓所に偏っている点は否めないものの、その成果が近世江戸の研究に与えた恩恵は大きい。例えば、石垣の構築等、寸法の基準は何に拠ったのか、そして各大名の互いの持ち場の調整はどうしたのかなど、これらは調査結果の分析があって初めて検証可能となる。大名・旗本の江戸屋敷はその特異な構造（広い御殿空間がある一方、江戸詰家臣たちの長屋が周囲を囲む）が確認されるとともに、地下室（地下倉）が当時広く普及していたという事実も明らかになった。それも文献ではなかなか知り得ないことである。陣屋研究の手法も方向性もまさにこれからにかかっている。両者による提携研究（いわばキャッチボール）が互いに更なる発展をもたらすことであろう。

なお、明治初頭の所謂房総新藩の城郭（陣屋）について城郭遺構という面から再考する試みがあった³⁰⁾。城郭史の最後を飾る事例であるとともに、近代化遺産との橋渡しも兼ねている。



図版4 館山市文化財協会会報

註

- 1 安川柳溪 1883『上総國誌』（改訂房総叢書刊行会昭和34年『房総叢書』第四巻）
- 2 小澤治郎左衛門 1889『上総町郷誌』
- 3『大日本国誌』安房第三巻（内務省地理局蔵版）近藤活版所 1886
- 4 齊藤夏之助 1908『安房誌』多田屋書店
- 5『印旛郡誌』印旛郡教育會1913／『長生郡郷土誌』長生郡教育會1913／『山武郡郷土誌』山武郡教育會1916／『市

- 原郡誌』市原郡教育會1913／『海上郡誌』海上郡教育會1917／『千葉縣香取郡誌』香取郡役所1921／『千葉縣匝
 瑳郡誌』匝瑳郡教育會1921／『夷隅郡誌』夷隅郡教育會1923／『千葉縣東葛飾郡誌』東葛飾郡教育會1923／『千
 葉郡誌』千葉郡教育會1926／『千葉縣安房郡誌』安房郡教育會1926／『千葉縣君津郡誌』下卷 君津郡教育會
 1927
- 6 千葉県 1919『稿本千葉縣誌 卷下』
 - 7 大類 伸編 1967『日本城郭全集』3 人物往来社
 - 8 千葉県教育委員会 1971・1972『千葉県中近世遺跡調査目録』県北部・県南部
 - 9『日本城郭大系』6 千葉・神奈川 新人物往来社 1980
 - 10 千葉県教育委員会 1995・1996『千葉県所在中近世城館跡詳細分布調査報告書Ⅰ—旧下総国地域—』・『同
 Ⅱ—旧上総・安房国地域—』
 - 11 千葉県教育委員会 1980『千葉県記念物実態調査報告書Ⅰ—飯野陣屋濠跡』ほか（飯野陣屋6文献一覧）
 - 12 千葉市教育委員会ほか 1988・1992『生実城址現地説明会資料』・『平成3年度千葉市遺跡発表会』資料
 - 13 松本 勝 1997『—千葉県富津市—富津陣屋跡発掘調査報告書』（財）君津郡市文化財センター／松本 勝
 2002「江川家文書の富津陣屋・台場絵図面について」『研究紀要』Ⅸ（財）君津郡市文化財センター
 - 14 齊藤礼司郎 2001『平成12年度木更津市内遺跡発掘調査報告書』木更津市教育委員会／稲葉昭智・矢野淳一
 1998「幕末陣屋遺構の一例—木更津市請西真武根陣屋について—」『研究紀要』Ⅷ（財）君津郡市文化財セ
 ンター
 - 15 鈴木 昭 2002『長尾陣屋跡・泉遺跡』（財）総南文化財センター
 - 16 柴田龍司 2006『東関東自動車道水戸線酒々井PA埋蔵文化財調査報告書3—酒々井町墨古沢遺跡—中世編』
 （財）千葉県教育振興財団
 - 17 和泉清司 1987「近世初期両総地域における検地と領主支配」『千葉県の歴史』33
 - 18 例えば、川村 優 1991『旗本知行所の支配構造』戦後の研究史など。
 - 19 例えば、村上 直 1968「初期関東における代官陣屋について」『対外関係と社会経済』塙書房／西沢淳男
 1998『幕領陣屋と代官支配』岩田書院ほか
 - 20 吉澤正巳 1991「幕末期の飯島陣屋の復元について」『信濃』第43巻第12号
 - 21 松原宏昌 1994「房総における複合寄生型代官所建築の概念」『千葉城郭研究』第3号
 - 22 原 剛 1998『幕末海防史の研究—全国的にみた日本の海防態勢—』名著出版
 - 23 山形 紘 2003『房総の幕末海防始末』崙書房
 - 24 浅川道夫 2010『江戸湾海防史』錦正社
 - 25『佐倉市史』1977／『富津市史』1980・1982／『勝浦市史』1991・2004
 - 26 筑紫敏夫 2005「近世後期の上総国富津陣屋について」『千葉史学』第46号ほか
 - 27 千葉県歴史教育者協議会編 2004『千葉県の戦争遺跡を歩く』ほか
 - 28 国土交通省関東地方整備局東京湾口航路事務所 2005『東京湾第三海堡史』
 - 29 千葉吉男 1982「長尾藩史考」『会報』第15号 館山市文化財保護協会／池田和宏 2001『北条村史』宮沢書
 房／鴨川市郷土史研究会 1988『花房藩』／上総町教育委員会 1969『上総町郷土誌』ほか
 - 30 池田光雄 2006「房総新藩の城郭について」『中世城郭研究』第20号

第1節 下総の陣屋

1. ^{いいぬま}【飯沼陣屋】（高崎藩出張陣屋）銚子市陣屋町字廓町ほか／下総国海上郡飯沼村

1. 当主 ①松平（五井）伊昌^{これまさ}—忠実^{ただかね}—昌長^{まさなが}—伊耀^{これてる}—忠益^{ただます}—忠明^{ただあき}

②松平（大河内）輝貞^{てるさだ}—輝規^{てるちか}—輝高^{てるたか}—輝和^{てるやす}—輝延^{のぶ}—輝承^{てるよし}—輝徳^{てるあきら}—輝充^{てるみち}—輝聴^{てるとし}—輝照^{てるな}

2. 封地 ①天正20（1592）年：下総国海上郡内2,000石
～元禄11（1698）年：遠江国志戸呂6,000石
②宝永7（1710）年：摂津・相模・上野・下総国内50,000石（この内、下総国海上郡は5,000石）～明治4（1871）年

3. 位置 松平氏の陣屋は現在の陣屋公園一帯に相当する。公園に陣屋絵図を元にした案内施設がある。五井松平氏の陣屋地は不明ながら、大河内松平氏がその跡に入ったとすれば、同じ場所に営まれた可能性が高い。

4. 規模 不明ながら、長方形の区画北側に長屋門、南側に役所、左右に蔵や長屋があった。また、後方には足軽長屋が置かれた。

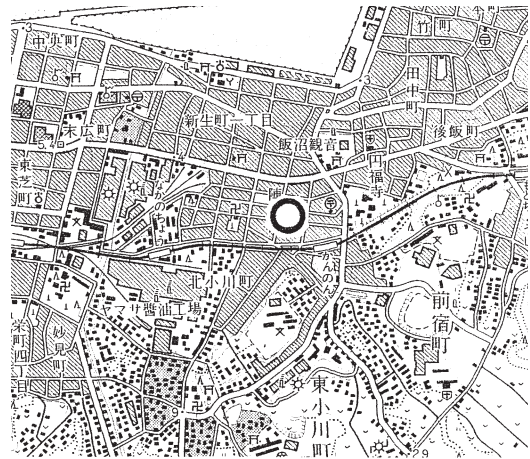
5. 歴史 ①伊昌は五井松平氏の家系で、父と共に家康に従い長篠城や長久手の戦いなどに活躍した。天正18（1590）年、徳川氏が関東へ移るや、下総国のうちにおいて2,000石を与えられた（『寛政重修諸家譜』）。資料①には文禄元（1592）年6月以降「飯沼松平外記」の記載がしばしば認められる。寛永4（1627）年、海上郡内4,000石を加増され、併せて6,000石となった。元禄11（1698）年、封地を遠江国に移されたが、忠実以降、幕末まで葬地は岡野台等覚寺に営まれた。なお、初代伊昌室をはじめとする一族の石塔が小見川町来迎寺にある。②輝貞は大名となった大河内松平氏3家の一つである信興系松平氏の系統で、享保2（1717）年、上野国高崎へ入ったときに、海上郡7か村を与えられた。陣屋役人の構成は文化7（1810）年時で、郡奉行1、中小姓1、代官2、供小姓1、御徒士1、小役人格1、小頭格2、足軽目付格3、足軽45、中間5であった（資料②）。特異な業務として、陣屋内で行われた塩辛の製造があげられるが、この他に難破船・寄鯨の処置などがあった。銚子ならではの。

6. 関連文献

- ①海上郡教育会 1917『海上郡誌』
- ②篠崎四郎編 1956『銚子市史』銚子市
- ③高崎市 2002 新編『高崎市史』資料編5 近世I

7. 関連資料

- ①家忠日記『増補 続史料大成』臨川書店
- ②「御領分家数調人数調」（文献③）



第3図 飯沼陣屋の位置



図版5 飯沼陣屋跡解説

2. 【三川陣屋】（旗本陣屋）旭市三川字宿・上川田／下

総国匝瑳郡三川村

1. 当主 高力忠弘—清弥—清慶—長昌—長民—長成—
長民—直三郎

2. 封地 貞享2（1685）年：下総国匝瑳・海上郡内
3,000石～明治元（1868）年

3. 位置 三川郵便局裏。

4. 規模 文献①に拠れば、陣屋跡は「四方堀」といい、
大正10年頃まで、堀の一部が残っていたとい
う。現在は山林となっており、当時の面影は
ない。

5. 歴史 高力氏は源平合戦で有名な熊谷直実の子孫であり、三河国高力を名字の地とした。戦国期に高力清長が出て、その孫に当たる島原藩主高力隆長の二男が忠弘である。貞享2（1685）年、下総国匝瑳・海上郡内3,000石を与えられたが、陣屋を設けたのは資料①に拠れば幕末の慶応元（1865）年に比定される。即ち、下総三川から江戸へ出て財を成した海上義胤は、高力家役人より「四方堀」の三川屋敷地に目を付けられ、陣屋として提供することになったという。陣屋へ詰めた役人は地元から登用し、知行地である、仁玉村・中谷里村・野中村・東小笹村・江ヶ崎村・三川村計約30名の名があげられている。貞享2年以降まったく陣屋が置かれなかったのかどうかは定かでないが、取りあえず当主・封地については当地知行段階としておく。最後の当主直三郎は幕末の慶応3（1867）年に京都町奉行を務めたが、維新後は仁玉村へ居住し、墓も不動院に現存する。

6. 関連文献

①飯岡町 1976『飯岡町史』史料集第一集

②飯岡町 1981『飯岡町史』

7. 関連資料

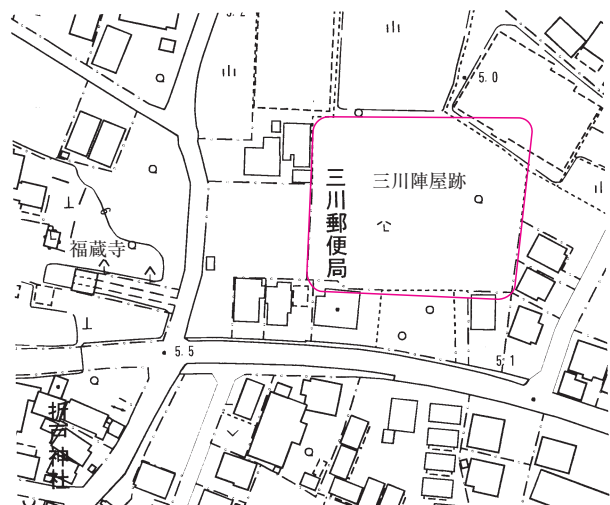
①「海上義胤一代記」（海上家文書／文献②所収）



第4図 三川陣屋の位置



図版6 高力直三郎の墓塔（仁玉不動院）

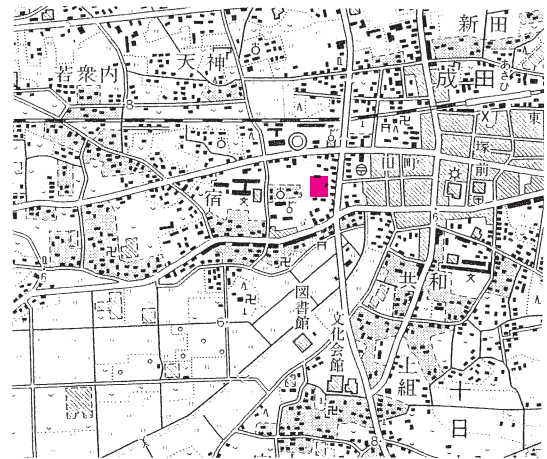


第5図 三川陣屋跡（旭市地形図1：2,500）

3. 【太田陣屋】（安中藩出張陣屋）旭市二字仲宿・上宿

／下総国匝瑳郡大田村

1. 当主 板倉勝清—勝暁—勝意—勝尚—勝明—勝殷
かつきよ かつとし かつおき かつなお かつあきら かつまさ
2. 封地 明和4（1767）年：上野・下総国内（匝瑳郡・香取郡・海上郡内）30,000石（この内下総領15,000石）～明治4（1871）年
3. 位置 旭市役所の南東約200mの旧砂堤上。
4. 規模 明治初頭の資料①に拠れば、八日市場へ向かう街道から少し中に入ってほぼ方形の三方濠囲みの陣屋地が確認され、元安中懸出張無税地 此坪六百二十二坪と注記される。南側中央に長屋門があり、その奥に惣建坪56坪の「舊廳」があり、西側に藩士長屋が並んでいた。
5. 歴史 板倉氏は三河国板倉を名字の地とし、深溝松平氏の与力であった。勝重代に三河3奉行の一人として頭角を現し、家康にその才を認められて京都所司代に任ぜられた。その後、遠江国相良城主、次いで安中城へ移封されたが、重同代に一旦安中を離れたものの、勝清代に復帰した。勝清は西ノ丸老中となり下総国で10,000石を加増され、以後幕末まで下総領は維持された。なお、陣屋が置かれたのは明和5年という。



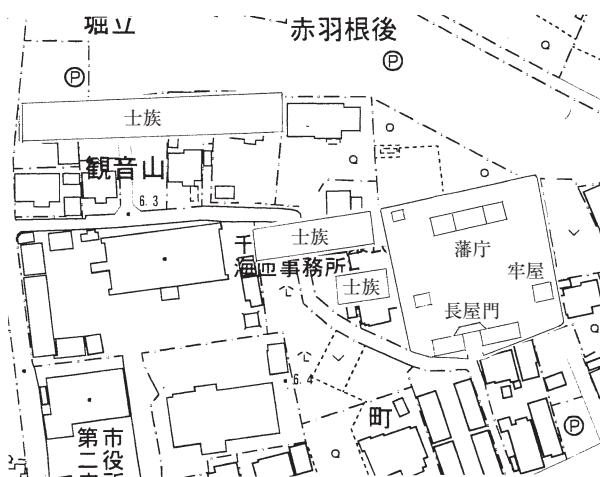
第6図 太田陣屋の位置

6. 関連文献

- ①海上郡教育会 1917『海上郡誌』
- ②旭市 1973『旭市史』第二巻
- ③安中市 2002『安中市史』第5巻近世資料編
- ④安中市 2003『安中市史』第2巻通史編

7. 関連資料

- ①「下総国匝瑳郡太田村貫属士族住居之麓絵図」（文献②所収）



第7図 太田陣屋見取図（文献②絵図から作成）

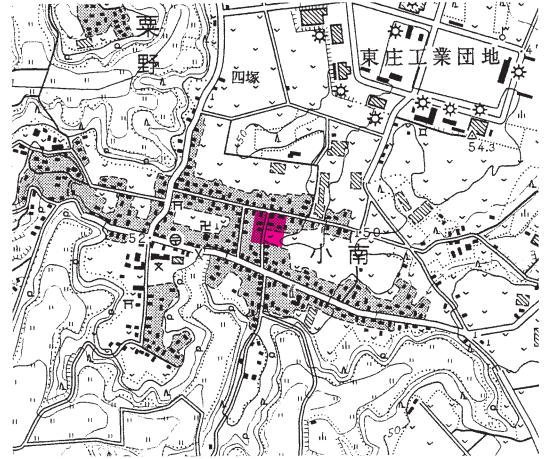


図版7 太田陣屋跡近景

4. 【小南陣屋】（旗本陣屋）東庄町小南字北裏ほか／下

総国香取郡小南村

1. 当主 松平（久松）定勝
2. 封地 天正18（1590）年：下総国香取郡内3,000石
～慶長6（1601）年：遠江国掛川城30,000石
3. 位置 文献①には松平氏陣屋址として「小南字北宿に在り今民居となり陣屋又は陣屋小路等の小字を存す」とみえる。蔵福寺と普巖院の間の北側一帯が該当すると思われる。
4. 規模 道路を境界とすれば、南北70m×東西90m程の規模となる。南側に北宿、街道沿いに上宿・中宿の字名が見られ、北西に津島神社がある。
5. 歴史 松平定勝は家康生母お大の方の再嫁した久松俊勝の四男であり、家康とは異父兄弟となる。天正18年（1590）、「九月十日下総国香取郡小南において、采地三千石」（「寛永重修諸家譜」）を与えられ、香取郡小南に陣屋を置いた。慶長6（1601）年、関ヶ原の役の功をもって27,000石を加増され、一躍掛川城主となり、陣屋は廃された。なお、現在陣屋の小字は確認されないが、陣屋小路突きあたりに屋号陣屋の民家が存在する。



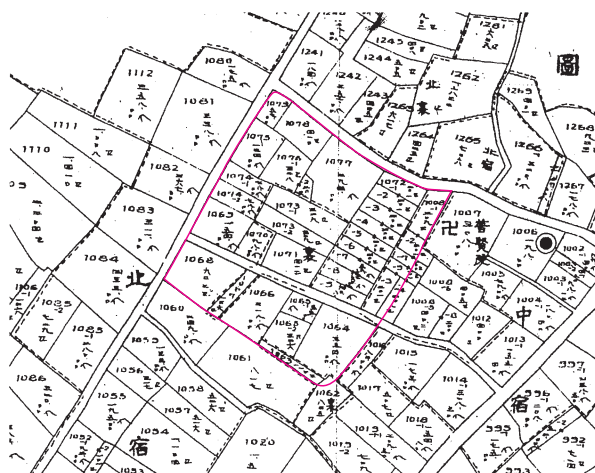
第8図 小南陣屋の位置

6. 関連文献

- ①千葉縣香取郡役所 1921『千葉縣香取郡誌』
- ②新人物往来社 1980「松平陣屋」『日本城郭大系』6

7. 関連資料

- ①大日本帝国市町村地図刊行会 1925『千葉縣香取郡東城村土地寶典』



第9図 小南陣屋地籍図（昭和13年土地宝典）



図版8 陣屋小路近景（南から）

5. 【^{かじろ}上代陣屋（城）】（大名陣屋）香取郡干潟町上代字要害ほか／下総国香取郡上代村

1. 当主 松平家忠^{いえただ}
2. 封地 文禄元（1592）年：下総国香取郡内ほか10,000石～文禄3（1594）年：下総國小見川城10,000石
3. 位置 桜井城とされているが、中世上代郷は現東庄町～干潟町に渡る広い範囲を指し（旧5か村）、東庄町和田砦（桜井城の北西約800m、字登城）など、再検討の余地もある。
4. 規模 東西200m、南北150m程の規模で、主郭を東端山上の土塁囲みの郭に置き、北側から東側山麓

（字家中内）が屋敷群と推定される。既に指摘されているように、桜井城は特別に新しい要素もないが、中腹から山麓には屋敷地としてまとまった平場がある。短い在城期間も考慮したうえで、これがまさしく家中屋敷に相当するかどうか、検証を要する。

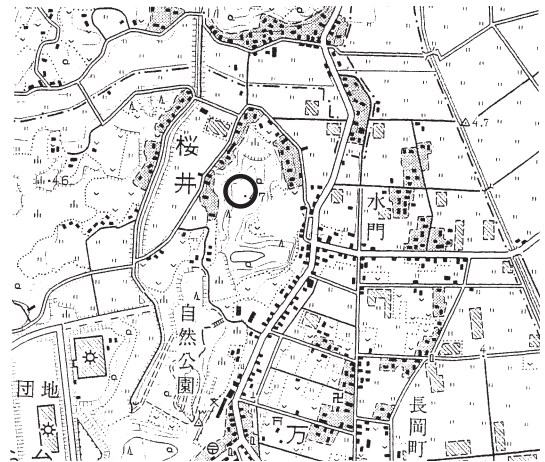
5. 歴史 家忠は深溝松平家の宗家に当たり、天正18（1590）年、徳川家の関東移封に当たり武蔵国忍城に入り、転じて文禄元（1592）年2月19日、下総国香取郡上代に移された。家忠の在城期間は文禄3（1594）年までの僅か3年に満たない短い間ではあったが、この間の動静は資料①によって詳しく知ることが出来る。それによれば文禄元年4月頃には館の屋根を葺いたことがわかるが、日記からは居城の普請の記載は一切ない。忍といい上代といい、何れにせよ仮の配置という側面があったのかもしれない。小美川（小見川）城に移って後の慶長5（1600）年、関ヶ原の前哨戦である伏見城の戦いにおいて、優勢な西軍を前にして鳥居元忠、内藤家長等と共に壮絶な討死を遂げた。

6. 関連文献

- ①香取郡役所 1916『千葉県香取郡誌』
- ②干潟町 1975『干潟町史』
- ③小高春雄 2011「松平家忠と上代」
『千葉城郭研究』10号

7. 関連資料

- ①「家忠日記」（『続史料大成』臨川書店）



第10図 上代陣屋の位置



図版9 上代陣屋字家中内遠景

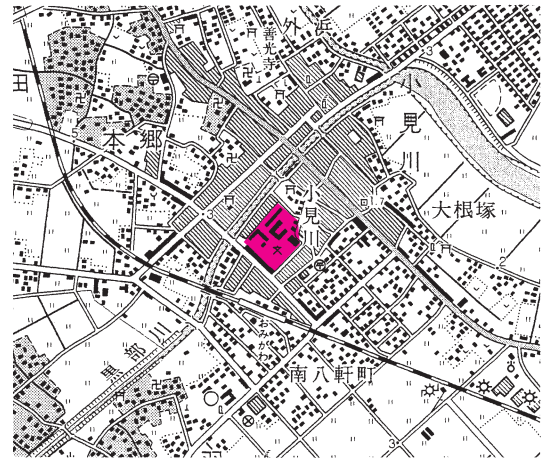


第11図 桜井城跡現況図（文献③）

6. 【小見川陣屋】（大名陣屋）香取郡小見川町小見川字

館之内ほか／下総国香取郡小見川村

1. 当主 内田正親—正美—正良—正純—正肥—正谷—
正道—正徳—正繩—正学
2. 封地 享保9（1724）年：下野・下総国内（香取郡）10,000石～明治4（1871）年
3. 位置 現小見川小学校を中心とする一帯。文献①には「西北黒部川を帯び、三方に壘塹の址を存す」とある。
4. 規模 南北175m、東西150m程の略長方形の区画をなし、現小見川小学校地に黒部川河畔までを加えた範囲に相当する。川を越えた西側に本町、仲町、田町等の町場が連続する。
5. 歴史 内田氏は今川氏家臣に始まり、のち家康に仕える。正信代の寛永16（1639）年、下総・常陸で加増され10,000石となり、のちに鹿沼を居所とする。享保9（1724）年、正親代に小見川に移され、元禄元（1688）年、館之内に陣屋が置かれた。陣屋は旧藩士家に伝えられた絵図（作成年代不明）に拠れば、南に大手門、西に通用門（明治30年代の写真有：文献③）、東側に御殿・家中長屋、西側に役所・武具蔵・組長屋、北側に米蔵が置かれ、黒部川には水門を通して内堀から出入り出来るようになっていた。周囲は濠が巡っており、その外側には北側を除いて外曲輪と記載されるが、利用状況は不明である。なお、津出場としては小見川河岸、菩提寺に仲町本願寺があげられる。



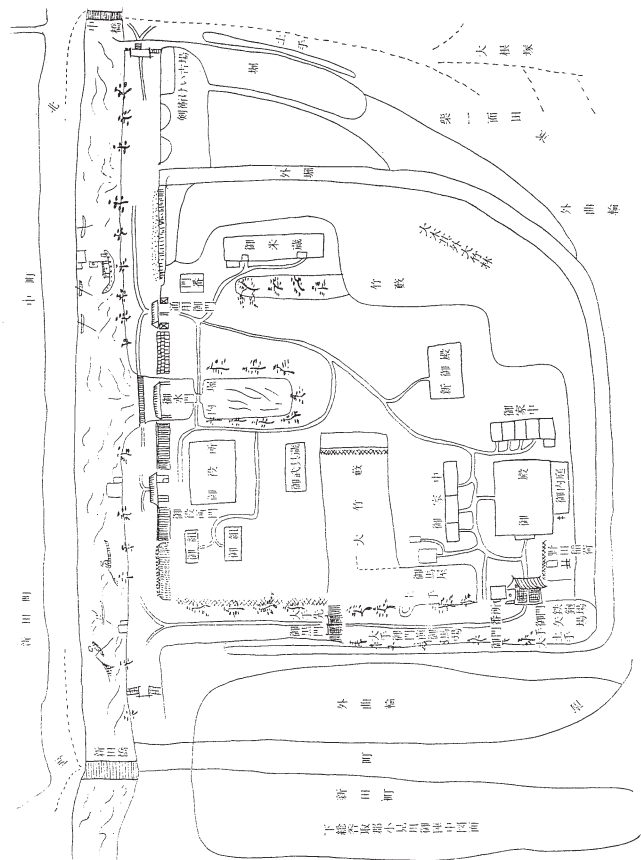
第12図 小見川陣屋の位置

6. 関連文献

- ①千葉県 1919『千葉縣誌』巻下
- ②小笠原長和ほか 1970「下総小見川藩の成立と藩領の構造」『千葉大学人文学部紀要』第2号
- ③小見川町教育振興協議会 1970『小見川の歴史』
- ④小見川町 1985『小見川町史』史料集（第一集）
- ⑤小見川町 1991『小見川町史』通史編

7. 関連資料

- ①「小見川領内諸事覚書」（木内神社文書）
- ②「下総香取郡小見川御陣中絵図」（堀家文書／文献③ほか）

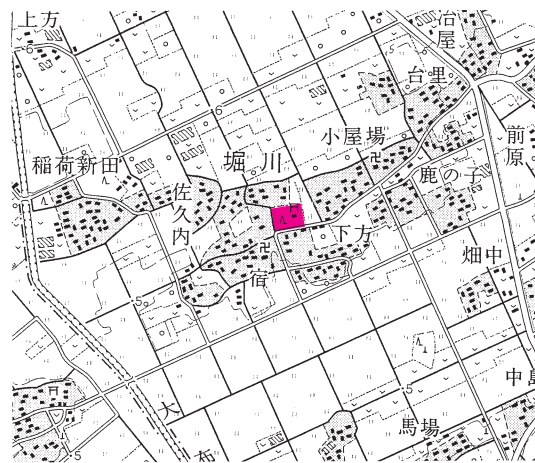


第13図 小見川陣屋絵図（文献③）

7. 【堀川陣屋】（西端藩出張陣屋） 匠瑳市堀川字荒生後

ほか／下総国匠瑳郡堀川村

1. 当主 本多忠鵬^{ただゆき}
2. 封地 明治元年（1868）：安房・上総・下総国内ほか10,500石（匠瑳郡内9,000石）～明治4（1871）年
3. 位置 文献①に拠れば「堀河塁址 栄村大字堀川の中央姫塚に在り平坦にして方形を為し塁の高さ九尺濠二間計り郭の東北に池あり明治の初年三河西端藩陣屋を此に置けり」とある。現妙見社の地。
4. 規模 陣屋は約80m四方の規模であり、土塁と濠が良好に遺存している。道路改良に伴い行われた発掘調査（1,000㎡）は陣屋の西側に当たり、大小の土坑・溝が検出されているが、中世の所産と思われる（文献④）。但し、幕末期の陶磁器も出土しており、関連が指摘されようか。
5. 歴史 三河国西端藩本多氏は本多康俊の二男忠相（匠瑳郡小篠で出生か：小篠陣屋の項参照）を祖とし、当初1,000石から出発し、その後加増を受け寛永5（1628）年に上総国武射郡・下総国匠瑳郡で2,000石を与えられ、最終的には8,000石の大身旗本となっている。そして、元治元（1864）年、忠寛代に伊豆に於いて加増され大名（10,500石）となった。忠鵬は忠寛の嫡子で、慶応3年に藩主となった。翌年陣屋が堀川村に置かれたものの、僅か4年足らずで終焉を迎えた。



第14図 堀川陣屋の位置

6. 関連文献

- ①匠瑳郡教育会 1921『匠瑳郡誌』
- ②熱田白洋 1966『野栄町誌』
- ③野栄町 1985『野栄町史』
- ④鈴木義成 1999『千葉県野栄町 堀川館跡』

（財）東総文化財センター

7. 関連資料

- ①堀川陣屋出土遺物（文献④）



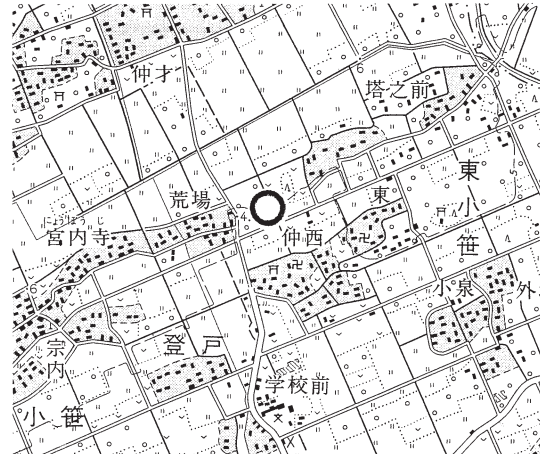
図版10 堀川陣屋跡近景



第15図 堀川陣屋調査位置図（文献④）

8. 【小笹陣屋】（旗本陣屋） 匝瑳市東小笹字城之内／下総国匝瑳郡東小笹村

1. 当主 本多康俊
2. 封地 天正18(1590)年：下総国匝瑳郡（ほか）5,000石～慶長6（1601）年：三河国西尾城20,000石
3. 位置 真言宗慈眼寺北側字殿屋敷が想定される。なお、遺跡分布地図では慈眼寺一帯、文献①ではより東の地に比定しており、何れも東小笹城跡とする。
4. 規模 殿屋敷周辺は戦前の資料①に拠れば水路が巡り、凡そ15,000㎡程の範囲となるが、その東西にも水路区画の空間が存在する。
5. 歴史 本多康俊は酒井忠次の次男で、天正8（1580）年に盟友本多氏へ養子に入った。同18年に下総国に於いて5,000石を与えられ、小笹に陣屋を構えた。文献③には、「五千石 采邑 下総国印旛郡佐倉領小笹従五位本多縫殿頭康俊」とみえるが、この小笹が匝瑳郡の小笹に相当すると思われる。かつて慈眼寺には本多氏の石塔・位牌があり（資料②）、当地の江波土氏はその子孫との伝承もある。また、三社大神は本多氏「当村在城之節勸請」とされ（資料②）、寛文4（1664）年以降数度にわたって改築・修繕を行ったという（文献①）。そうだとすればその後も当地との関係が続いたことになり、注目すべき事例といえる。慶長6（1601）年、関ヶ原の戦功により三河国西尾城20,000石の大名となり、陣屋は廃された。



第16図 小笹陣屋の位置

6. 関連文献

- ①匝瑳郡教育会 1921『匝瑳郡誌』
- ②八日市場市 1986『八日市場市史』下巻
- ③藤野 保校訂 1975『徳川加除封録』2刷 近藤出版社

7. 関連資料

- ①大日本帝国市町村地図刊行会 1937『共興村土地寶典』
- ②享和2年「東小笹村明細帳」（『千葉県歴史』資料編近世5）



第17図 字殿屋敷周辺地籍図（資料①）



図版11 慈眼寺近景

9. ^{いいだ}【飯田陣屋】（旗本陣屋）香取郡小見川町下飯田字根舞

ほか／下総国香取郡下飯田村

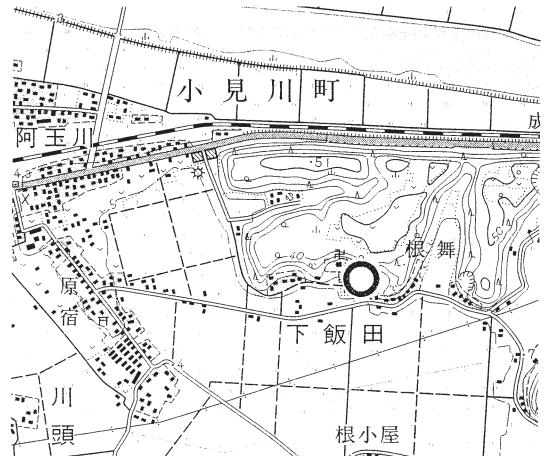
1. 当主 青山成重^{なりしげ}
2. 封地 天正18（1590）年：下総国香取郡内3,000石～
元和元（1615）年改易
3. 位置 文献①には「青山氏陣屋址」として、「下飯田
字根前に在り今畠地及山林たり」とあり、青山
氏所縁の西音寺付近一帯が該当すると思われる。
4. 規模 規模は不明ながら、地形条件（台地南麓谷地）
からすると、南北100m×東西200mの範囲内か。
5. 歴史 青山成重は旗本服部正信二男で、「寛政重修諸家譜」に拠れば、「十八年東照宮関東御入国のの
ち、下総国香取郡のうちにをいて、采地三千石をたまひ、…中略…慶長六年九月下総国のう
ちにをいて二千石の地を加へられ…中略…慶長十三年…十二月二十五日下総国にをいて五千
石の地を加増あり、すべて一万石を領し…中略…十八年八月大久保石見長安が事に坐して御
勘気かうぶり、加恩の地七千石を削られ下総国香取郡の采地に屏居す。…中略…（元和）元年
九月七日采地香取郡飯田において死す。年六十七いまだ恩免なくして死せしにより采地を没収
せらる。」とある。しかし、青山氏は幕末まで下飯田852石（資料①）を維持しているの
で、その後子孫に復活したのであろうか。なお、文献①では、陣屋の設置を慶長から寛永中のこと
としている。

6. 関連文献

①千葉縣香取郡役所 1921『千葉縣香取郡誌』

7. 関連資料

①「香取郡」『旧高田領取調帳 関東編』（近藤出版社 1969）



第18図 飯田陣屋の位置



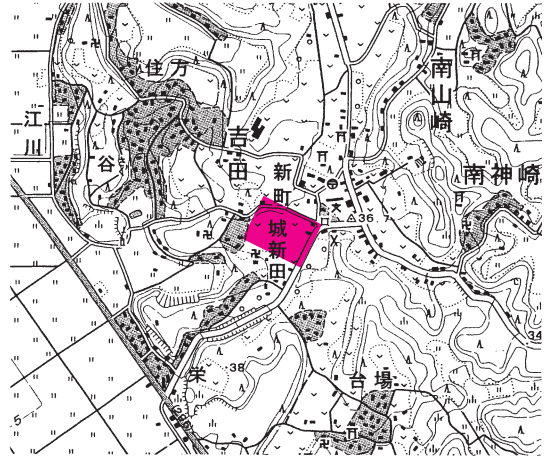
図版12 西音寺近景



図版13 飯田陣屋跡遠景

10. ^{よしだ}【吉田陣屋】（旗本陣屋） 八日市場市吉田字陣屋畑ほか
 ／下総国香取郡吉田村

1. 当主 稲垣^{しげとも}重大^{しげさだ}
2. 封地 寛永12（1635）年：上総・下総国内（香取郡内ほか）6,000石～元禄11（1698）年：近江国神崎郡山上
3. 位置 文献①には「吉田村大字吉田字城に在り今民居耕圃たり里人称して陣屋畠と名づけ馬場跡等の地名尚ほ存す熊野神社の社後に属す」とみえ、現在熊野神社、陣屋畑、馬場先等の字名共にあり。
4. 規模 土地宝典には陣屋跡の区画が明瞭に読みとれ、それに拠れば東西200m×南北150m程の規模となる。
5. 歴史 稲垣氏は戦国期に牧野氏の与力として、当初今川氏、後に徳川氏に従い、長茂代に戦功を積み、天正18（1590）年の関東移封時には上野・下野領国で3,000石を与えられた。重大はその三男で、元和元（1615）年の大阪の陣後に上総国内の400石を皮切りに加増を受け、寛永12年には併せて6,000石の大身旗本となった。この年の3,000石新恩の地が香取郡であったと思われる。子の重定は貞享2（1685）年、若年寄昇進と共に5,000石新たに加増され、併せて13,000石の大名となった。「寛政重修諸家譜」重定の項では「これより先丹波国の地を除き、其余の所領を常陸国のうちにうつされ、のち常陸国の領地を近江国野洲、蒲生、甲賀、神崎、坂田、浅井六郡のうちにうつされ、神崎郡山上を居所とす」とある。とすれば、山上移封前に常陸へ移った可能性もある。



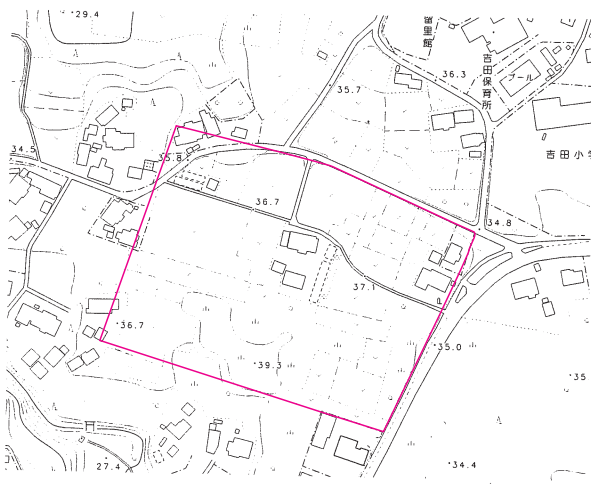
第19図 吉田陣屋の位置

6. 関連文献

①千葉縣香取郡役所 1921『千葉縣香取郡誌』

7. 関連資料

①大日本帝国市町村地図刊行会 1937『吉田村土地寶典』



第20図 吉田陣屋の規模と範囲（資料①）



図版14 吉田陣屋跡近景

11. ^{いいざき}【飯笹陣屋】（旗本陣屋） 香取郡多古町飯笹字高野

ほか／下総国香取郡飯笹村

1. 当主 松平（久松）康盛—^{やすもり やすとよ やすまさ やすくに}康豊—康正—康国
2. 封地 天保13（1842）年：武蔵・上総・下総国内（香取郡内ほか）6,000石～明治元（1868）年
3. 位置 栗山川支流の多古橋川上流左岸の台地上に立地する（多古カントリークラブ1km北東）。
4. 規模 谷津に面する台地西側中段に広い平場があり、その東側山林中に方形の区画また壇がみられる。文献②には「丘上僅かに土塁の形を存す今は桑圃麦田相連り旧時の状見る可きなし… 当時は敷地一万余坪」とある。



第21図 飯笹陣屋の位置

5. 歴史 始祖康元は家康異父兄弟の長兄に当たり、天正18年に下総国関宿20,000石を与えられた。その後、子の忠良代に加増され美濃国大垣城、次いで、孫の忠憲代に信濃國小諸城へと移ったものの嗣無く一時断絶したが、康顕代に復活し、康郷代には香取郡ほか（武蔵・上総）で6,000石を与えられた。孫の康盛代に飯笹に陣屋を構える。以後、幕末まで下総領を維持し、明治元年を迎えた。現在陣屋跡は畑、山林となっており、旧状は窺えないが、文献③によれば間口30m弱の長屋門を入った下段に役所・家臣住居・長屋・武道場が、中段に御殿（若御殿）・馬場があり、ほかに白州、獄舎もあったという。地籍図では陣屋中央東西を横切るように細長い区画がみられるが、これが門と通じる内部の道の跡かもしれない。なお、御殿の稲荷社は現存する。

6. 関連文献

- ①千葉県 1919『千葉県誌』巻下
- ②千葉県香取郡役所 1921『千葉県香取郡誌』
- ③多古町 1985『多古町史』下巻

7. 関連資料

- ①「控帳」ほか（萩原家文書／文献③）



図版15 飯笹陣屋跡下段平場近景



図版16 飯笹陣屋跡中段平場近景

12. 【多古陣屋】(大名陣屋) 多古町多古字陣屋下ほか／下

総国香取郡多古村

1. 当主 ①保科正光
②松平(久松) 勝義—勝忠—勝以—勝房—勝尹
—勝全—勝升—勝行—勝権

2. 封地 ①天正18(1590)年：下総国香取郡内10,000石
～慶長5(1600)年：信濃国高遠城25,000石
②寛永12(1635)年：上総・下総国内(香取郡内)8,000石～明治4(1871)年

3. 位置 現多古小学校一帯の小高い地。

4. 規模 文献②に拠れば、明治6年の競売時点では、邸

地800坪、山地500坪、囚獄圃地100坪と記す。この他に役所や長屋群があったはずで、地形などから判断すると、15,000㎡程度はあったものと思われる。文献②に天保7(1836)年時の絵図と御殿間取り図が載せられており、平地に接する2面に堀を巡らし、東側に2か所の門(表門・中門、全体では3か所)があった。なお、堀は一部屈曲がみられる。

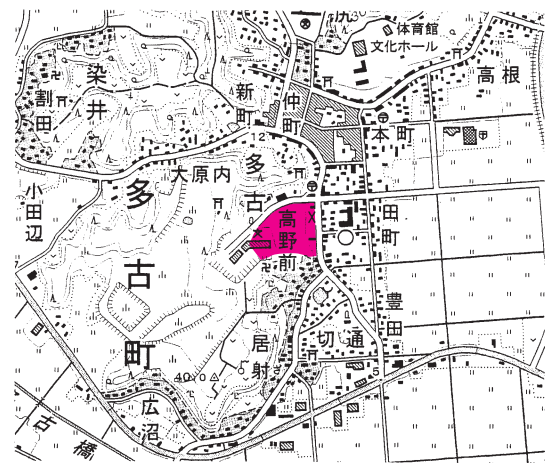
5. 歴史 ①保科正光は信濃高遠城主で、武田氏次いで徳川氏に仕え、天正18(1590)年、関東移封に伴い下総多古に移った。関ヶ原戦後、15,000石を加増され、旧領の高遠へ戻った。養子の正直は將軍秀忠の四男である。②松平勝義は家康の異父弟に当たる久松松平勝俊を祖とし、「寛永十二年十一月九日遺跡を継。このとき采地を上総国武射、下総国香取両郡の内につつされ、寄合に列し、香取郡多古を居所」とした(「寛政重修諸家譜」)。この勝俊は武田の人質となり三河への帰路凍傷となり足の指を失ったことで有名な人物である。正徳3(1713)年、勝以の代に12,000石(摂津国加増後下野国へ移される)となり大名に列する。最後の勝権は井伊直弼の弟で、勝升の養子となった。墓(明治元年没)は多古町妙興寺にある。なお、陸奥国檜葉・石川分領には出張陣屋(富岡町)が置かれた。絵図に拠れば陣屋は石垣また土塁が巡り(北側墨線は屈曲)、外側には濠も確認される。この内、東側のラインは旧状を保っており、石垣はその当時のものと紹介されることが多い。なお、門は現在の多古小校門の位置ではなく、その北側にあった。

6. 関連文献

- ①小笠原長和ほか 1969「下総栗山川流域村落の史的考察」『千葉大学人文学部紀要』第1号
②多古町 1985『多古町史』上巻
③多古町 1985『多古町史』下巻
④千葉県教育委員会 2000「多古」『集落・町並』

7. 関連資料

- ①「多古村絵図」(文献②)



第22図 多古陣屋の位置



図版17 多古陣屋跡と天神社

13. ^{たかおか}【高岡陣屋】（大名陣屋）成田市高岡字羽ヶ塚・馬場

ほか／下総国香取郡高岡村

1. 当主 井上正重—正清—政蔽—正鄰—正森—正國—
正紀—正瀧—正域—正和—正順

2. 封地 延宝4（1676）年：上総・下総国内（香取郡
ほか4郡内）10,000石～明治4（1871）年

3. 位置 JAかとり下総支店周囲一帯の地。現地に高
岡陣屋址の石碑あり。資料③には「居所下総
之内 沢井大和田 自江戸十八里」とある。

4. 規模 資料①によれば東西200m、南北130m程の変
形複郭構成をなし、東側に御殿・役宅、西側

に藩士長屋群が配置され、間は堀で仕切られていた。大手表門は東側、裏門は北西端にあった。また、北側には枡形状の屈曲がある。高岡遠藤家（四郎右衛門）には陣屋裏門と長屋が現存する。なお、文献①には面積2,570坪とある。

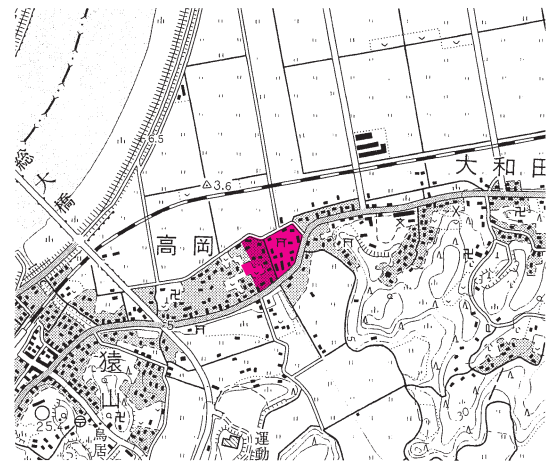
5. 歴史 高岡井上家は浜松井上氏の分流で、始祖の政重は井上正就の弟に当たり、キリシタン弾圧に名をはせ、寛永17（1640）年に10,000石の大名となった。政蔽代^{まさあきら}の延宝4（1676）年に陣屋を建設し、以後、幕末まで存続する。高岡藩士族は小林、大野、飯島、川島、板倉、中野、飯野、宮嶋、駒塚、藤沢、小塩、森、岡村、長坂ほか96家であった。なお、大和田妙印寺に一族で陣屋取締井上正栄系の墓所がある。

6. 関連文献

- ①千葉県香取郡役所 1921『香取郡誌』
- ②磯辺大暢 1975『下総国高岡藩井上氏に関する資料—その1—』私家版
- ③下総町 1985『下総町史』近世編史料集1
- ④（財）印旛郡市文化財センター 2009「高岡陣屋跡」『年報』24

7. 関連資料

- ①作成年代不明「高岡藩井上氏陣屋之図」（高岡小学校蔵）
- ②『系図纂要』（名著出版 1968）



第23図 高岡陣屋の位置



図版18 大和田妙印寺井上家墓所近景



図版19 陣屋内堀（左端裏門跡）



図版20 高岡陣屋御殿跡現状

高岡藩井上氏陣屋之図



注
 1. 本陣は、高岡川左岸の井上氏家寺の跡地にあり、御用院、
 2. 御殿、中門、東門の跡地は、井上氏の家臣の跡地と見られる。
 3. 御殿の北西、天井裏に二重葺きであったと見られる。

第24図 高岡陣屋見取図(文献②)所収図縮小 1:1,000

14. 【大貫陣屋】（津藩出張陣屋）香取郡神崎町大貫字藤

ノ木ほか／下総国香取郡大貫村

1. 当主 藤堂高次—高久—高睦—高敏—高治—高朗—
高悠—高疑—高兌—高猷—高契

2. 封地 元和元（1615）年：下総国香取郡内3,000余石～明治4（1871）年

3. 位置 江戸時代末期の文献①には「天神山景色よし、麓に領主の陣屋あり」とみえる。また、近代の文献②には、「大貫字藤木に在り今民居たり之を陣屋跡と称す」と記す。

4. 規模 天神山の南から西の麓には水路が巡っており、この水路と山際までの間（凡そ南北60m、東西120m）が陣屋跡と想定される。

5. 歴史 藤堂氏は浅井氏に仕えた近江の土豪から身を起こし、中興の祖高虎代に主君を転々とした後、羽柴秀次ついで秀吉に仕えて重用され、活躍した。秀吉亡き後は家康に接近し関ヶ原の戦いでは東軍に属して一躍200,000石の大大名となった。また、戊辰戦争ではいち早く官軍に応じ、そんな経緯もあってかさすが藩祖の薫陶著しいと揶揄されている。下総領を得たのは元和期以降であり、幕末まで維持された。知行地は陣屋を設けた大貫の他に、片野・村田・大戸川・飯島・曲淵・鳥羽・桜田・南敷・馬乗里・横山・小見川の村々であった。なお、現地支配は奉行・代官各1・手代（地元名主）・巡察等で構成されていた。

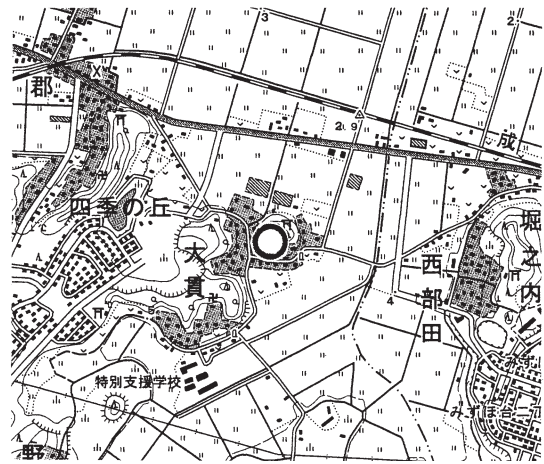
6. 関連文献

①清宮秀堅 1845「下総国旧事考」1905復刻 吉川弘文館

②千葉県香取郡役所 1921『千葉県香取郡誌』

7. 関連資料

①明治26年「下総国香取郡藤堂氏旧封邑之碑（文献②）」



第25図 大貫陣屋の位置



図版21 大貫陣屋跡近景



図版22 大貫陣屋跡背後山上藤堂氏石碑

15. 【郡陣屋】（佐賀藩出張陣屋） 香取郡神崎町郡字岩

崎ほか／下総国香取郡郡村

1. 当主 鍋島忠茂—^{ただしげ}正茂—^{まさしげ}正恭—^{まさやす}直旨—^{なおむね}長行—^{ながゆき}

2. 封地 慶長5（1600）年：下総国香取郡内5,000石
～元禄11（1698）年：三河・遠江両国7郡内

3. 位置 神崎町郡円光寺西側の地で、水濠が一部遺存する。文献②には、「郡区字岩崎に在り面積九百余坪今民居と為り之を陣屋跡と称す」とある。

4. 規模 範囲は明瞭ではないが、文献②の記載に従えば約3,000㎡となる。

5. 歴史 鍋島忠茂は肥前佐賀城主鍋島直茂の二男で、「寛政重修諸家譜」に拠れば、慶長五（1600）年、「質とし江戸にいたり、東照宮に拝謁す。この時仰により台徳院殿に勤仕し、御小姓となり、下総国香取郡矢作領のうちにおいて馬飼料五千石を充行」われた。ただこの時点で陣屋を建設したかは明らかでなく、文献②では元和2（1616）年としている。元禄11（1698）年に下総領が三河国に移ったことで、陣屋も廃止となった。なお、文献①には「上小川村ニ圓通寺ト云禅刹アリ、此寺ニ鍋島内匠頭ノ墓石アリ、此家元禄ノ比マテ郡村ニ陣屋アリシト云」とある通り、佐原市上小川円通寺には一族の墓石（忠茂、忠茂室、正茂、正恭、直旨）や位牌等が存在する。

6. 関連文献

①清宮秀堅 1845「下総国旧事考」1905復刻 吉川弘文館

②千葉県香取郡役所編兼発行 1921『香取郡誌』

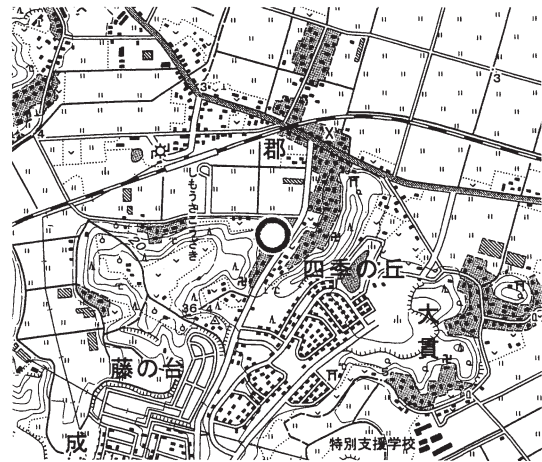
③佐原市 1966『佐原市史』

④佐原市 1985『肥前、鹿島藩鍋島氏の遺跡』

7. 関連資料

①円通寺墓石銘文（文献④）

②円通寺鍋島氏位牌と鍋島氏関係過去帳法名（文献④）



第26図 郡陣屋の位置



図版23 郡陣屋跡遠景



図版24 円光寺近景

16. ^{おほり}【大堀陣屋】（大名陣屋） 佐倉市大佐倉字北大堀／

下総国印旛郡大佐倉村

1. 当主 ①武田信吉^{のぶよし}
②松平忠輝^{ただてる}
2. 封地 ①天正18（1580）年：下総国（印旛郡内）
40,000石～慶長7（1602）年：常陸国水戸城100,000石
②慶長7（1602）年：下総国（印旛郡内）
30,000石～慶長8年：信濃国川中島城
3. 位置 文献①には「万千代屋敷在本佐倉南称大堀地清光寺之後方也即源信吉公建館之地也公慶長



第27図 大堀陣屋の位置

- 七年十一月移常陸水戸弟忠輝卿封八年三月移信濃川中島館廢」とある。また、文献②の「本佐倉村千葉家古城址の図」には清光寺の西脇に「万千代殿ヤシキ」と注記されている。
4. 規模 大堀陣屋は店舗や道路建設に伴い、約7割程の範囲が調査されている（文献④⑤）。それによれば、規模は東西約80m、南北60mの長方形を呈し、周囲を幅約4m～5m・深さ2m～3mの空堀が巡っており、南と東中央部が開口し、ここが門に相当すると思われる。館跡内部には中・近世の遺構として、掘立柱建物約28棟・土坑約600基・地下式坑12基・井戸約35基・土坑墓75基、溝多数ほかが確認されている。
 5. 歴史 武田信吉は家康の五男で、母は茶阿の局。文献③には文禄元年「下総国佐倉の城を参らせらる…慶長七年十一月、常陸国水戸の城に移り給ひ」とある。また、入れ替わって佐倉へ入った松平忠輝は同じく家康の六男で、「慶長七年の春、下総国佐倉の城を賜はらせ給ひ、上総介忠輝と名のり給ふ。明くれば八年二月六日、信濃国川中島に移り給ひ」と記されている。この佐倉の城とは年代からして、現在の佐倉城ではなく、敢えていえば本佐倉城である。この点、文献①・②の記載（要するに地元ではそのような伝承が遺っていた）とどう対応するのだろうか。一つの解釈としては、資料①（江戸中期以降か）に「勝胤始て本佐倉の大堀の地に城を築き立候」とある点で、つまり、大堀を居館、本佐倉を城郭として活用した可能性があるのではないだろうか。調査報告の詳細は概要のみのため不明ながら、南側堀部分に当たる平成17年時の調査（文献④⑤）では堀内から多量の遺物が出土したものの、その年代観は武田・松平両氏の佐倉在封期間と一致しない事実（なぜならそうであれば瀬戸・美濃大窯4段階の製品が一定量あってよいはず）が明らかとなったが、そう考えれば納得がいく。ただ、引用した資料は何れも後世の所産であり、更なる検証が必要である。
 6. 出土遺物 南辺西側堀底から約70cm程高い位置でカワラケが大量に出土した（約300点）。その一帯ではカワラケは併せて約700点にのほり、まさにカワラケ溜まりである。この他、堀内各所から約200点、計900点のカワラケが出土したことになる。これは南堀、それも約半分程度の調査であるから、全体の数量は予想出来ない。堀内からは中国陶磁片（白磁・染付）、瀬戸・美濃陶器片（天目・皿・茶壺・挿鉢）、常滑甕片が出土しているが、消耗品という性格上、挿鉢の年代がこれら遺物群の投棄時期を指し示すと考えられる。即ち、藤沢瀬戸・美濃編年（文献

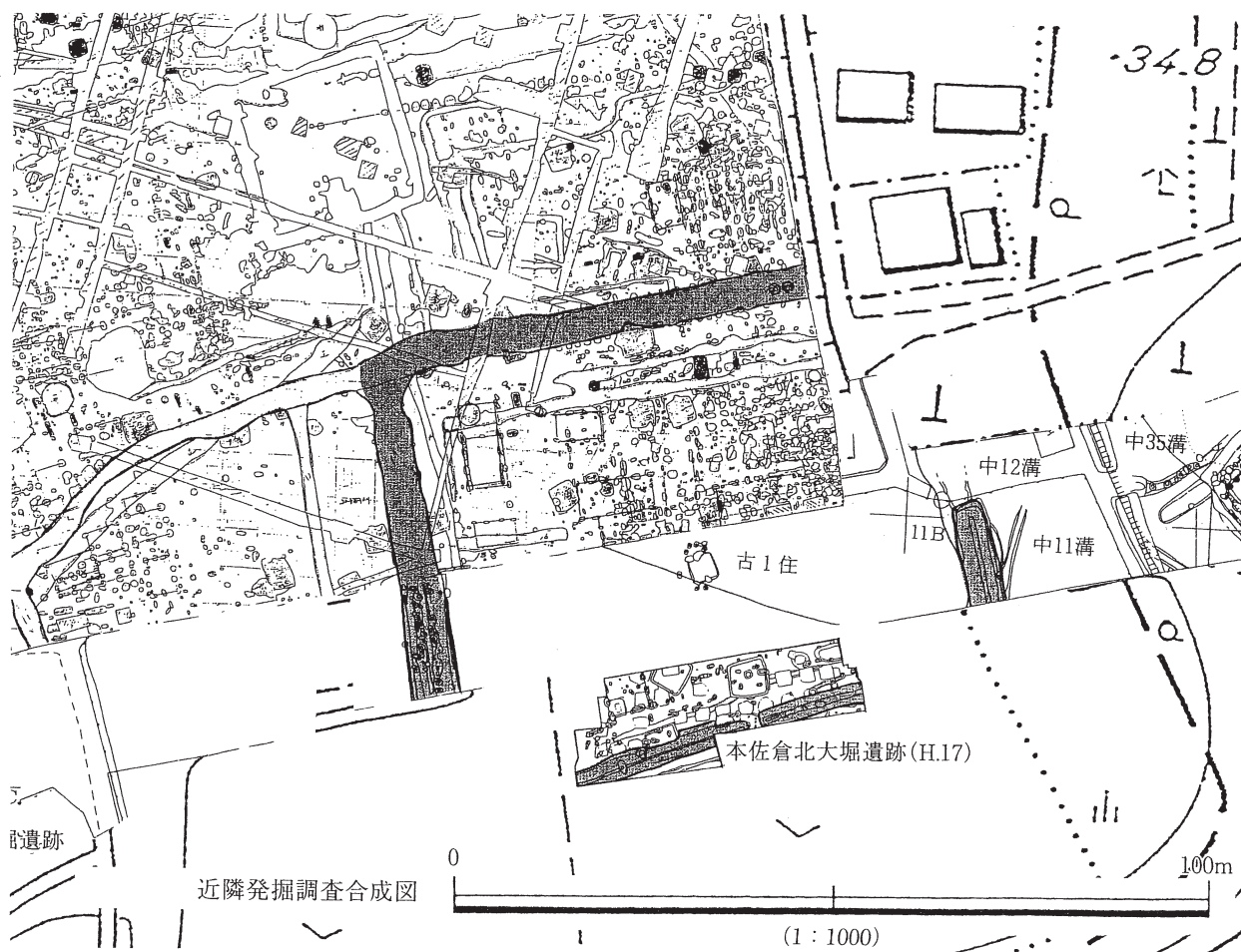
⑥) では、後期Ⅳ～大窯1段階に相当し、実年代では15世紀末～16世紀前半に比定される。しかし、居館内では大窯2段階の瀬戸・美濃製品も出土しているようで(文献⑦)、そうすると継続して使用されたことになる。

7. 関連文献

- ① 清宮秀堅 1845「下総国旧事考」1905復刻 吉川弘文館
- ② 中路定俊 1858『成田参詣記』(有峰書店)
- ③ 『新編 藩翰譜』第五卷(新人物往来社 1977版)
- ④ 大澤 孝 1993・1994「酒々井町本佐倉大堀遺跡」『(財)印旛郡市文化財センター年報』9・10
- ⑤ 竹内順一・天本昌希 2006『本佐倉北大堀遺跡』(財)印旛郡市文化財センター
- ⑥ 藤沢良祐 2001「瀬戸・美濃大窯製品の再検討」『研究紀要』第10輯(財)瀬戸市埋蔵文化財センター
- ⑦ 井上哲朗 2004『平成16年度企画展図録 中世房総やきもの市場』千葉県立房総のむら

8. 関連資料

- ① 「鹿島山草分并城主代々之事」(『佐倉市史』巻一)



第28図 大堀陣屋跡検出状況(文献⑤)

17. 【岩戸陣屋】(旗本陣屋) 印西市岩戸字市場ほか／下

総国印旛郡岩戸村

1. 当主 米津田政一田盛

2. 封地 慶長9(1604)年：武蔵・上総・下総国内(印旛郡ほか)5,000石～貞享元(1684)年：武蔵国久喜12,000石

3. 位置 文献①には、「岩戸ニ…米津家ノ陣屋モアリ」とみえるのみながら、文献②には「岩戸区市場豊田又兵衛の屋敷続きこれなりと云ふ」とある。また、文献③では「岩戸砦址に接す、地勢平坦にして四面埜地を存し今陸田となる。」とある。現西福寺境内および南側隣接地に相当する。

4. 規模 約100m×85mの主郭と約110m×50mの副郭よりなる。1990年に西福寺墓地造成工事に伴い発掘調査が行われ(報告は文献⑤)、掘立柱建物・土坑墓群、地下式坑が検出された。出土した遺物は15世紀～16世紀代の瀬戸美濃製品・在地産土器、18世紀以降の陶磁器、それに、石塔(宝篋印塔・板碑片)、金属製品、砥石、銭貨(唐・宋・明・寛永)等であった。中世戦国期の岩戸城と、近世西福寺墓地の有様が反映された状況であったと推測する。

5. 歴史 米津氏は徳川(松平)氏に代々仕え、政信四男田政は当初家康後家忠に仕えて戦功を重ね、慶長9年、下総国印旛郡・相馬郡・香取郡内ほかで5,000石を与えられた。その子田盛も秀忠に近仕し、寛文6(1666)年に大阪定番となり、摂津・河内両国内で10,000石を加増され、大名となった。「寛永重修諸家譜」では貞享元年に久喜に居所を営むとはあっても、それ以前の居所は記していない。ここでは地元の伝承に従い岩戸城址を陣屋跡とするが、発掘の成果を見る限り、それに対応した様相とは言い難い。岩戸城址そのものは規模が大きく、土塁・堀も明瞭で、明らかに戦国も末期の様相である。戦国城郭をそのまま陣屋としたのであろうか。

6. 関連文献

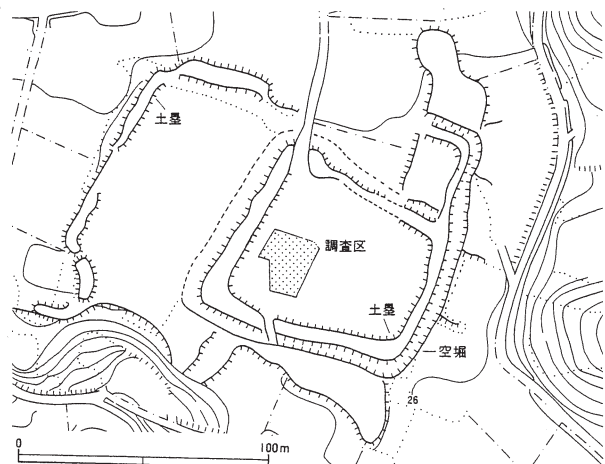
- ①清宮秀堅 1845「下総国旧事考」(1905復刻)
- ②千葉県印旛郡役所 1913『千葉県印旛郡誌』後編
- ③千葉県 1919『千葉県誌』巻下
- ④印旛村 1984『印旛村史』通史I
- ⑤飯島信一 1991『千葉県印旛郡印旛村 岩戸城跡内岩戸市場遺跡』(財)印旛郡市文化財センター



第29図 岩戸陣屋の位置



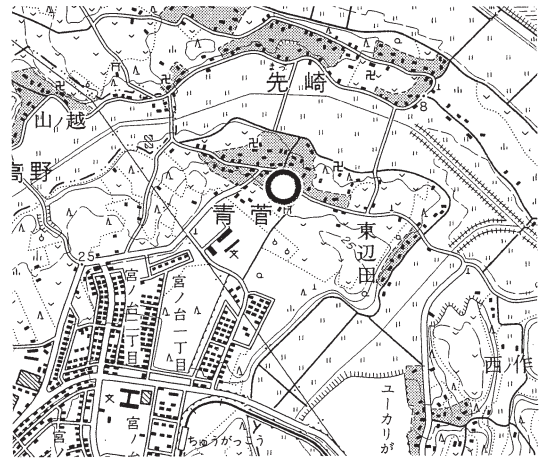
図版25 岩戸陣屋跡近景



第30図 岩戸陣屋跡と調査区

18. ^{あおすげ}【青菅陣屋】（旗本陣屋） 佐倉市青菅字稲荷ほか／
下総国印旛郡青菅村

1. 当主 川口宗勝—宗信—宗次—宗恒
2. 封地 慶長11（1606）年：下総国印旛郡・葛飾郡内
2,500石～元禄11（1698）年：下総国印旛郡
内・香取郡内・相馬郡内2,700石
3. 位置 青菅称念寺一带を字陣屋口、その南側を字稲
荷といい、陣屋はこの一角に所在したと想定
される。
4. 規模 元禄11年、領主交代に伴い作成された村明細
帳に、「一陣屋跡 下畑式畝廿四歩 是ハ御



第31図 青菅陣屋の位置

- 先祖御陣屋御座候拾七年焼失仕り候ニ付跡畑ニ被成…」(文献①)とみえるが、地籍図では屋号陣屋の方形区画は約5畝となる。
5. 歴史 川口氏は美濃川口村を名字の地とし、数代尾張の織田氏に仕えていたが、宗勝代に秀吉に従い、尾張履掛城主となった。その後一時没落したものの、慶長10（1605）年に徳川氏に仕えて、旗本に列した。宗信—宗次と嗣ぎ、四代目の宗恒は御徒頭から長崎奉行に昇進している。この宗恒代か前代の内に江戸屋敷へ移ったと思われる。川口氏の墓所は正福寺に営まれたが、陣屋背後の字大塚にはその名のとおり大きな塚1基、それに小さな塚も1基あり、川口氏の墳墓と伝承される。また、白井には宗信代に分かれた旗本・宗重の墓塔が存在する。なお、川口氏は社寺へ多くの寄進をしたようで、現在も白井八幡社の石灯籠や称念寺の仏像などがのこされている。

6. 関連文献

- ①小島令孝 1960「志津誌」『佐倉市誌資料』第三輯 佐倉市公民館
- ②佐倉市 1971『佐倉市史』巻一

7. 関連資料

- ①佐倉市教育委員会 2009「青菅の大塚・小塚」『平成19年度佐倉市埋蔵文化財発掘調査報告書』



図版26 青菅陣屋跡近景

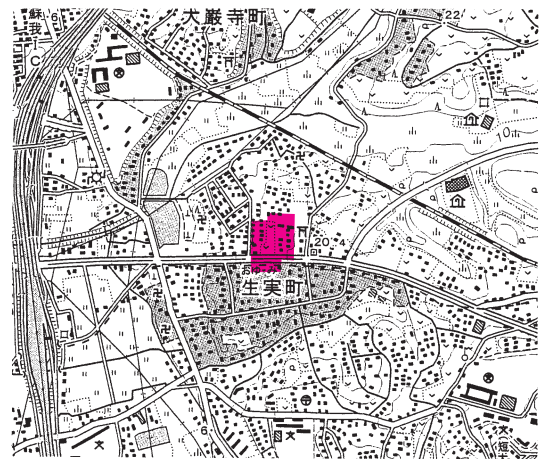


第32図 青菅陣屋跡付近（昭和14年土地宝典）

19. 【生実陣屋】（旗本陣屋）^{おゆみ}千葉市緑区生実町旧字舊邸

ほか／上総国千葉郡北生実村

1. 当主 ①西郷家員—忠員—康員—正員
いえかず ただかず やすかず まさかず
 ②森川重俊—重政—重信—俊胤—俊常—俊令
しげとし しげまさ しげのぶ としたね としつね としのり
としたか としとも としたみ としひら としのり としかた
 —俊孝—俊知—俊民—俊位—俊徳—俊方
2. 封地 ①天正18年（1590）：下総国千葉郡内5,000石
 ～元和6年（1620）：安房国長狭郡東条10,000石
 ②寛永4年（1627）：上総・下総・相模国内10,000石～明治4（1871）年
3. 位置 生実町生実神社西側の隣接地。南側を市道66線が走る。

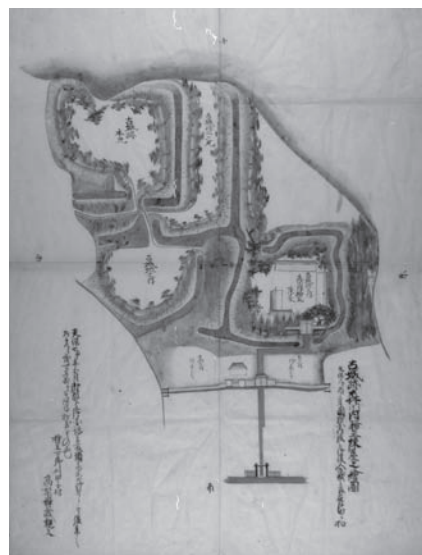


第33図 生実陣屋の位置

4. 規模 近世天保期の陣屋絵図に拠れば、中世生実城の出郭を陣屋としたもので、周囲に空堀・土塁を巡らし、隅の屈曲する略長方形（東西125m×南北145m）の地で、現況や土地区画からすると凡そ16,000㎡程と想定される。但しこれは森川氏時代の姿であり、西郷氏は原氏の生実城に入った可能性がある。
5. 歴史 ①西郷氏は今川氏次いで徳川氏に仕え、家員代の天正18（1590）年に徳川氏の関東移封に伴い、生実に入った。2代忠員、3代康員（忠員弟）と若年で没している。慶長19（1614）年、4代正員（康員弟）のとき里見家改易に伴い安房国に至り館山城受取の役を務める。家康側室西郷局はこの西郷氏の出身である。②森川氏は当初堀部を称し、織田氏のち徳川氏に仕え、氏俊代に森川と改めた。その三男が重俊であり、秀忠の近習となった。室は失脚した大久保忠隣の養女であった関係から一時酒井家に預けられたが、大阪の陣の戦功を考慮され、赦免される。秀忠政権末期に側近として仕え、寛永5（1628）年に老中となり、同9年秀忠に殉じた（49歳）。元禄2年、地方直しに伴い相模国内所領を下総内に移される。陣屋下の重俊院に森川氏当主・室および一族の石塔が林立する。房総では江戸初期から幕末まで存続した陣屋は数少ないが、生実陣屋はその一つである。なお、藩校は郁文館と称した。



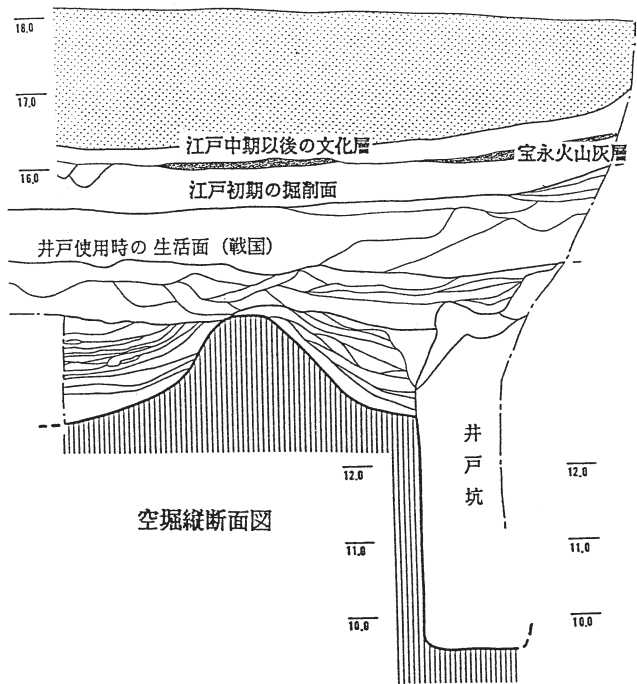
図版27 生実陣屋跡近景



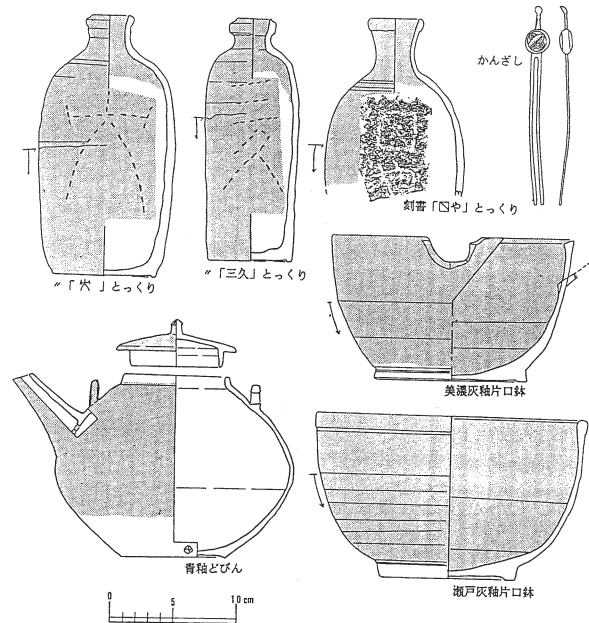
図版28 「古城跡森川内膳正陣屋之絵図」（資料②）

5. 発掘調査（文献⑥、図34・35）

昭和63（1983）年度に、道路建設に伴い当陣屋南東端部が発掘調査された。中世生実城の空堀（幅11m～12m、深さ7m～8m、堀障子を伴う薬研堀）や井戸が廃城段階で3m程埋められたが、江戸時代初頭には深さ4m～5mの箱堀状を呈し、堀底は通路として使われたこと、幕末までの間に1m程埋没し上層には江戸中期以降の陶磁器類が大量に埋没していたこと等が明らかとなった。西郷家は里見氏に対応するために当地に配置されたためか戦国期城郭を使用したこと、また、郭内の土坑からも江戸時代末期の大量の陶磁器類が出土したことから、付近に存在した倉や足軽長屋等からの廃棄が推測されている。



第34図 生実陣屋の堀断面図（文献⑥）



第35図 生実陣屋跡出土遺物（文献⑥）

6. 関連文献

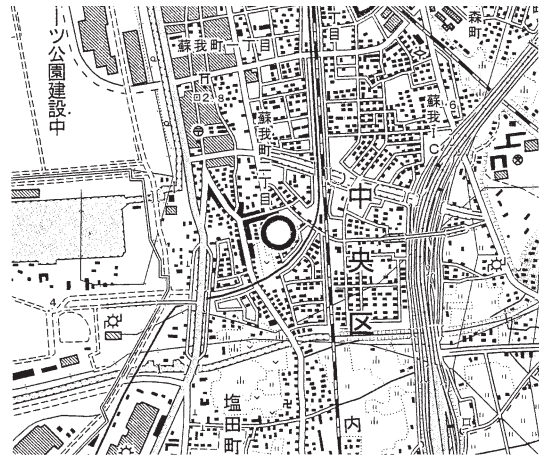
- ①千葉県 1968『千葉県史料』近代編・明治初期
- ②千葉県公共図書館協会 1979『生実藩主森川家旧藏史料目録』
- ③千葉市 1980『千葉市史』史料編3近世
- ④井上準之助 1980「生実藩についての若干の考察」『千葉県の歴史』19
- ⑤須田 茂 1991『房総諸藩録』崙書房
- ⑥（財）千葉市文化財調査協会 1988『生実城址 現地説明会資料』

7. 関連資料

- ①寛延3年「北生実村絵図」（千葉県立中央図書館蔵）
- ②天保8（1837）年「古城跡森川内膳正陣屋之絵図」（千葉県文書館蔵）
- ③明治初頭「生実藩陣屋見取図」（千葉県文書館蔵）
- ④天保7（1836）年「森川山御墓所見取図」（千葉県立中央図書館蔵）
- ⑤明治初期「生実藩官邸図」（個人蔵）

20. 【^{そがの}曾我野陣屋】（大名陣屋）千葉市中央区蘇我町二丁目／下総国千葉郡曾我野村

1. 当主 戸田忠綱^{ただつな}
2. 封地 明治3年（1870）：下総国千葉郡内10,000石～明治4（1871）年
3. 位置 蘇我町二丁目旧小字陣屋。内房線と並走する京葉臨海鉄道が海側に分離する西側隣接地。
4. 規模 約200m四方（約43,800㎡）内の海濱地ながら、正確な規模は不明。周囲に土塁と堀が設けられていたようであり、東側に出入口らしき出張りがみられる（資料①）。
5. 歴史 忠綱の父忠至が兄の宇都宮藩主戸田忠友から10,000石を分与され（下野国塩谷郡高德）、版籍奉還後の明治3年に下総国曾我野に移った。翌4年に廃藩置県となったため、曾我野藩は僅か1年数か月で消滅した。陣屋一带は現在都市化が進み、かろうじて道路が境界を示唆するのみで、旧状は窺えない。



第36図 曾我野陣屋の位置

6. 関連文献

①千葉市史編纂委員会編 1993『絵にみる図でよむ 千葉市図誌』千葉市

7. 関連資料

①明治9年「曾我野村字限絵図」（文献①）



図版29 「曾我野村字限絵図」（文献①）



図版30 曾我野陣屋跡東側境界

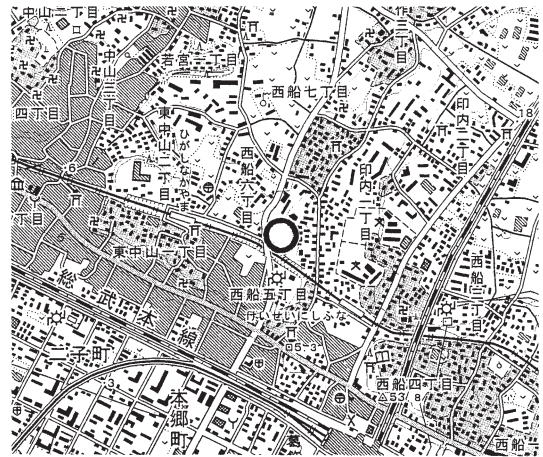


図版31 曾我野陣屋跡北側道路現状

21. 【栗原陣屋】(犬山藩出張陣屋) 船橋市西船六丁目／

下総国葛飾郡本郷村

1. 当主 成瀬正成まさなり ゆきなり ゆきとら一之成一之虎
2. 封地 慶長5 (1600) 年：甲斐・三河・下総国(葛飾郡)内34,000石～寛永11 (1634) 年無嗣断絶
3. 位置 宝成寺境内とする考えがある一方、延宝6 (1678) 年検地帳に屋敷跡の記載(文献②)があり、「御蔵下」「御蔵脇」等の小字地がそれに該当するのではないかとする(文献②)。
4. 規模 同様、文献②に延宝6年検地帳に拠るとして「五筆二反二畝六歩」と記す。
5. 歴史 成瀬正成は家康の小姓から出発し、「十八年小田原陣のときも供奉し、関東にいらせたまふの、ち下総国葛飾郡栗原郷にをいて采地四千石」(「寛永重修諸家譜」)を与えられた。慶長5 (1600) 年、甲斐国に於いて2,000石を加増され、老中に列し、更に三河国で10,000石を加えられ併せて34,000石となった。慶長17 (1612) 年、尾張藩の付家老の一人となり、元和2 (1616) 年には藩主義直から犬山城を与えられた。それに伴い、藩の家督を次男之成が嗣ぎ、三河・下総・武蔵国内15,000石を相続した。寛永11 (1634) 年、之成が死去し、之虎が相続するも同15年5歳で没し、断絶した。西船橋宝成寺には之成、之虎を始め、幕末までの成瀬氏一族の石塔が林立し、栗原成瀬氏が断絶した後は本家の菩提寺の一つであったことを物語っている。
6. 関連文献
 - ①船橋市 1959『船橋市史 前篇』
 - ②須田 茂 1991『房総諸藩録』崙書房
7. 関連資料
 - ①成瀬氏一族・家臣石塔銘文(「栗原藩成瀬家資料調査報告 付・西船成瀬氏墓地について」『船橋市史研究』7 船橋市史編さん委員会 1992)



第37図 栗原陣屋の位置



図版32 宝成寺参道



図版33 宝成寺成瀬家墓所近景

22. ^{おもり}【大森陣屋】（代官陣屋—淀藩出張陣屋） 印西市大森字下宿ほか／下総国印旛郡大森村

1. 当主 ①守屋助次郎

②稲葉正知—正任—正恒—正親—正益—正弘
—正謀—正備—正発—正守—正誼—正邦

2. 封地 ①下総国幕府領：延宝4（1676）年～元禄14（1701）年

②享保8（1723）年：河内・山城・越後・下総国内（印旛郡ほか）102,000石（この内下総領約25,000石）～明治4（1871）年

3. 位置 印西市役所裏手の通称陣屋畑一帯にあり、木戸は木下から江戸への街道に面していた。

4. 規模 資料②から約8,000㎡程と推測される。中央に本陣、南側に長屋門、背後に長屋、ほかに蔵らしき建物が確認される。なお、木戸からは二度屈曲して門に至る。

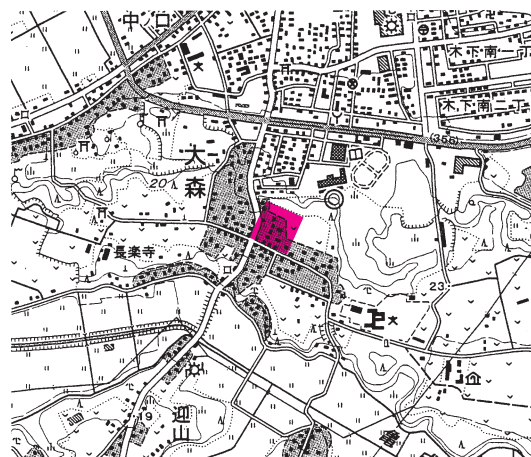
5. 歴史 ①守屋氏は廩米200俵の旗本であり、布川陣屋代官権太夫の子である。父と同じく、幕領代官の道歩み、大森陣屋で主に新田開発に当たった。②稲葉正知は一族の宗家筋で、正成（妻春日局）から数えて5代目に当たる。元禄14（1701）年、老中となり佐倉へ移封された（約10,000石）。享保8（1723）年、山城国淀へ転封されたものの、その領地の一部が飛地として残ったことから、村方の要望もあり、大森にあった幕府の古陣屋を取り立てて陣屋とした。陣屋の運営は江戸屋敷の勘定奉行の元、通常代官2名（東代官・西代官）・手代3名・使番6名で構成され、手代以下は地元出身者からも登用した。なお、天保期以降の代官一覧は文献④でまとめている。

6. 関連文献

- ①五十嵐行男 1976「幕末期淀藩下総領における藩政の展開」『成田市史研究』第4号
- ②須田 茂 1976「淀藩下総領の構造と陣屋支配」『幕藩制社会解体期の研究』
- ③印西町 1986『印西町史』史料集近世編一
- ④鏑木行廣 1991「淀藩下総領大森陣屋と飛地支配」『房総地域史の諸問題』
- ⑤印西市 2011『印西市歴史読本』中世・近世編

7. 関連資料

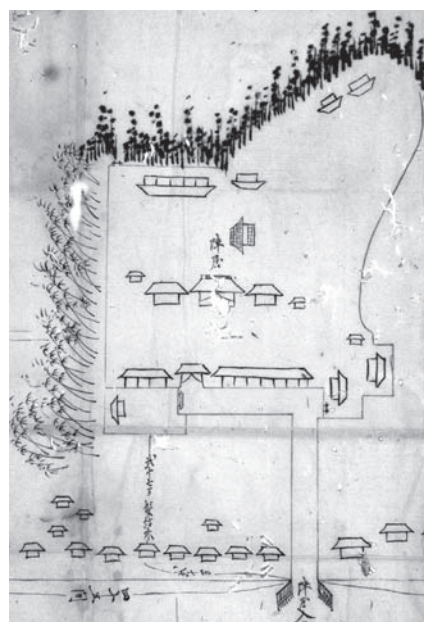
- ①「竹袋村旧来記」ほか（文献③）
- ②「大森村宿並略図」（宮島家文書／文献⑤）



第38図 大森陣屋の位置



図版34 陣屋背後から内部を見る



図版35 絵図にみられる大森陣屋（資料②）

23. 【^{ふじごろ}藤心陣屋・^{ふなと}船戸陣屋】(大名陣屋) 柏市藤心字大宮戸

／下総国葛飾郡藤心村・沼南町船戸字不動堂脇

／下総国葛飾郡船戸村

1. 当主 本多^{まさしげ}正重—^{まさつら}正貫—^{まさなお}正直—^{まさのり}正矩—^{まさなが}正永—^{まさのり}正矩—^{まさ}武—^{まさよし}正珍—^{まさもと}正供—^{まさはる}正温—^{まさあき}正意—^{まさもと}正訥

2. 封地 元和2年(1616)：近江・下総国内(相馬郡) 10,000石～明治元(1868)年：安房国長尾 40,000石

3. 位置 藤心陣屋は文献④に拠れば通称「御代官跡又ハ御役所跡」と呼ばれ、宗寿寺の北約200mの大津川に面した低位段丘面にある。一方、船戸陣屋(役所)は船戸会館東約100mの不動堂一带に相当する。

4. 規模 藤心陣屋は文献①に「南相馬御役屋敷 坪数六百六拾四坪」(約2,200㎡)とみえる。一方、船戸陣屋は「六畝拾式歩 御役所屋敷」(約640㎡)とあり、遙かに小さい。

5. 歴史 本多氏は家康の側近である正信の弟正重を祖とし、元和2(1616)年に正重が下総国葛飾郡ほかで10,000石を与えられた。このときに葛飾郡舟戸に陣屋を構えたともされる。一旦万石以下

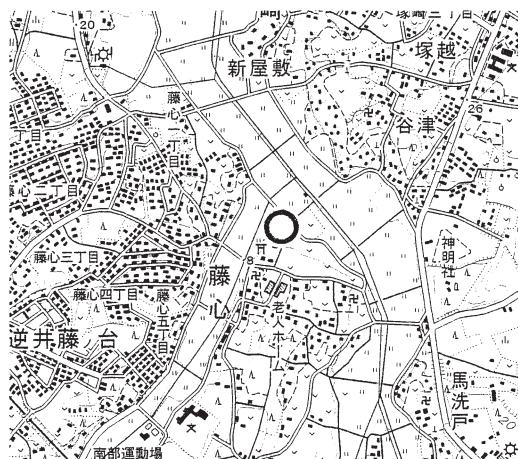
となったが、元禄元(1688)年に再度10,000石となり、そのことを記した「本多四公日記」には「御在所相馬郡藤心村」と記している。両者の住み分けは中相馬領が船戸陣屋、南相馬領が藤心陣屋であったという。元禄16(1703)年、上州沼田、享保15(1730)年、駿河国田中へ移るも、下総領は継続支配が認められ、幕末まで存続した。なお、歴代陣屋代官一覧は文献⑥参照の事。

6. 関連文献

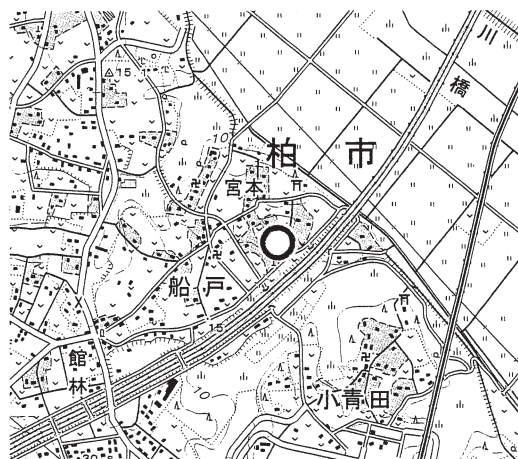
- ①千葉県東葛飾郡教育会 1923『千葉縣東葛飾郡誌』
- ②柏市 1969『柏市史資料編一 富勢村誌』
- ③柏市 1970『柏市史』資料編七
- ④柏市 1971『柏市史』資料編二 土・千代田村誌
- ⑤藪原敏吏 1990「本多下総領の成立について」－「本多四公日記」と「家譜」の紹介をかねて－『鎌ヶ谷市史研究(第3号)』鎌ヶ谷市教育委員会
- ⑥柏市 1995『柏市史』近世編

7. 関連資料

- ①「船戸村郷指出帳」(文献③)ほか



第39図 藤心陣屋の位置



第40図 船戸陣屋の位置



図版36 藤心陣屋跡近景

24. 【木野崎陣屋】（旗本陣屋） 野田市木野崎字下町ほか

／下総国葛飾郡木野崎村

1. 当主 一色義直—照直—（義直）—直氏—直房—直与
2. 封地 元和～寛永年間：下総国相馬郡内5,165石～元禄11（1698）年：三河国設楽郡長篠陣屋
3. 位置 利根川に面した標高約10m～13mの平坦な半島状台地上。
4. 規模 南北350m×東西200m。台地周囲を水路が取り巻いており、これを濠とみる見方がある。なお、現状では台地上に堀・土塁等は遺存しない。
5. 歴史 関東一色氏は古河公方に従い幸手を拠点とした

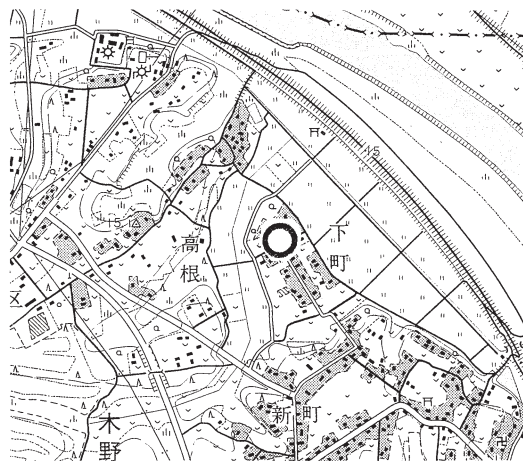
ことから幸手一色氏とも呼ばれる。天正18年の秀吉の北条氏征討に際しては、その軍勢に従ったようで（岩槻城攻城戦）、その経緯か戦後の天正19年に幸手領約5,000石を宛行われた。元和～寛永期の間、葛飾郡から相馬郡へ所領が移されるのに伴い、子照直の急死に際し再度当主となった義直は木野崎に陣屋を構えた。現状では陣屋の遺構は明瞭でないものの、台地先端には屋号城山（しろやま）の青木家があり、その下を城下（しろじた）という。台地全体は字下町（したちょう）である。3代後の直与代の元禄11年、三河国鳳来へ知行替えとなった。なお、義直、直氏ほか転封前の一族の墓は守谷大円寺ないし幸手宝聖寺にある。現在台地上には一色家の旧家臣筋と伝える青木一族のほか、小山・小磯家がある。

6. 関連文献

- ①松下邦夫 1993「市域村々の近世初期領主と知行者」『流山市史研究』第10号 流山市教育委員会
- ②田代 脩ほか 2000『幸手一色氏』幸手市教育委員会
- ③幸手市 2003『幸手市史』通史編Ⅰ
- ④井上哲朗 2005「木野崎城跡」『野田市史 資料編 考古』

7. 関連資料

- ①一色氏諸系図（文献②）



第41図 木野崎陣屋の位置



図版37 木野崎陣屋跡遠景



図版38 陣屋跡近景（奥の民家が屋号城山）

25. 【^{やまざき}山崎陣屋】（大名陣屋）野田市山崎字梅台・堤台ほか

／下総国葛飾郡山崎村・堤台村

1. 当主 岡部康綱—^{やすつな}長盛^{ながもり}
2. 封地 天正18（1590）年：上総・下総国内12,000石～
慶長14（1609）年：丹波国亀山約32,000石
3. 位置 当初梅台（海福寺）、のち堤台（寺山）に陣屋を構える。「岡部由緒書」（文献④所収）には、「天正十八年庚寅年、壹万貳千石之御領地被成御拝領、則下総国葛飾郡庄内領山崎村当分之御屋敷出来、同年十一月十二日御引移、翌十九辛卯年、同所堤台ト云所ニ御城御普請致成就、山崎より彼御城エ御引移被成候」とみえる。
4. 規模 堤台城址は江戸川低地に面した小高い台地上に立地するが、既に指摘されているように（文献⑧）、その実態は不明のままであり、それ故文献⑦においても近代の図等を豊富に掲載しているのである。「堤台岡部城址想定図」（文献②）に拠れば、堀・土塁を備えた3郭構成となるが、これはあくまで想定図である。なお、梅台については現海福寺からその西側公園一带と推測されており、何れにせよその近辺であろうがこれまた正確な位置は比定し得ず、当然規模も不明である。
5. 歴史 岡部氏は駿河国の国人を出自とし、当初今川氏次いで武田氏に仕え、武田氏が滅んだ後には徳川氏に臣従し、関東移封に伴い下総国山崎に入った。「寛政重修諸家譜」には「上総下総両国のうちにおいて一万二千石をたまひ、下総国山崎に住す」とある。入封時の領地一覧は資料①で確認される。長盛の継室は松平康元の娘であるが、この女性は傳通院（家康母）の養女であった関係から家康の妹として長盛に嫁した。岡部氏の野田居住は20年に及んだが、最初の1年が梅台、残りが堤台であった。慶長14年8月、20,000石を加増され、丹波亀山に移された。なお、市内海福寺（慶長4年長盛開基）に長盛の母（月宮院殿桂庵宗信大姉／慶長9年7月13日没）と子孫に当たる最後の岸和田城主岡部長盛の石塔があるが、前者の造立年代は型式からして『下総国旧事考』で指摘されているように享保年間と思われる。



第42図 山崎陣屋の位置

6. 関連文献

- ①清宮秀堅 1845「下総国旧事考」1905復刻 吉川弘文館
- ②佐藤 真 1963『堤台城主 岡部長盛公事蹟史料集』興風会図書館
- ③藤枝市 2010『藤枝市史』通史編上
- ④平野明夫 1995「堤台城主岡部氏関係史料調査報告」『野田市史研究』第6号 野田市
- ⑤平野明夫 2002「岡部氏の歴史－岡部氏関係史料集解題」『野田市史 資料編中世2』野田市
- ⑥柴 裕之 2003「岡部正綱の政治的位置」『野田市史研究』第14号 野田市
- ⑦野田市 1999『野田市史』資料編中世2
- ⑧佐藤 真 1985『野田郷土史』
- ⑨下津谷達男・飯塚博和 1987『千葉県野田市梅の台遺跡』野田市遺跡調査会

7. 関連資料

- ①「岡部家由緒書」(文献④)
- ②岡部長盛母石塔銘文(海福寺)



図版39 海福寺近景



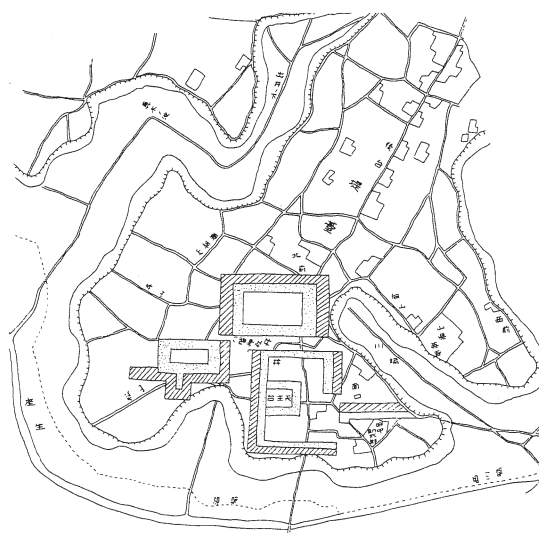
図版40 岡部長盛母石塔



図版41 山崎陣屋跡遠景



図版42 海福寺岡部長寛墓塔

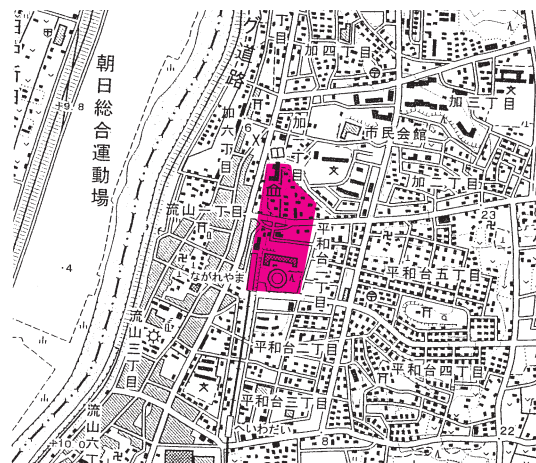


第43図 堤台城址復元図(文献②)

26. 【加陣屋】（代官陣屋・葛飾県庁）流山市加字坂の下

ほか／下総国葛飾郡加村

1. 当主 本多正訥^{まさもり}
2. 封地 文久3（1863）年：駿河・下総国内（葛飾郡）40,000石（この内下総領約16,000石）～明治元（1868）年：安房国長尾40,000石
3. 位置 現流山市役所から流山市立博物館にかけての地。御殿は北端、長屋は3列×9棟であった。
4. 規模 文献①所載の「流山町加村台本多紀伊守仮宅後葛飾印旛県庁」図には御殿・長屋・役所・牢獄等の図を載せており、南北300m×東西



第44図 加陣屋の位置

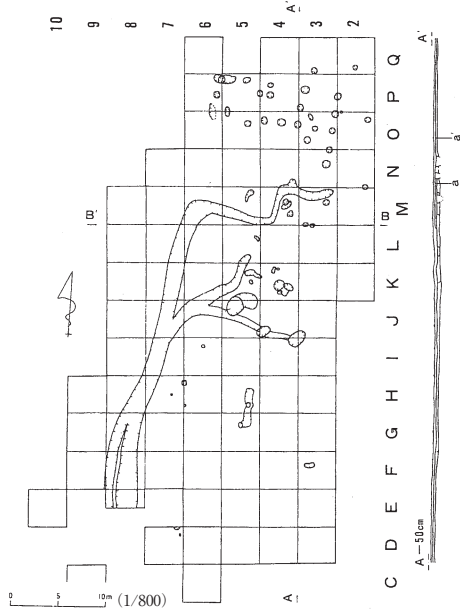
- 150m程の規模と推測される。昭和52年～53年にわたって現市立博物館・図書館建設に先立つ発掘調査（凡そ70m×35m）が行われた。調査区域は陣屋北西端に当たり、東西5間×南北約1間の礎石建物（坪地業）と、その東に南北4間になるかもしれない大きな礎石建物跡、またその南側には西側並びに東西を区画する境界溝らしき溝等が検出された。報告では細長い長屋とするが、後世の開墾等の影響を受けており、旧状を復元し難いとする。位置関係からして、大きな建物らしき棟は御殿、その西側の1棟はその付属建物ないし長屋の可能性はあるが、南側で長屋の痕跡が確認されていないなど、「仮宅図」の解釈も含め、問題を残す結果となった。現地は市街化が進み現在復元も困難となりつつある。なお、出土遺物として幕末から明治期の瀬戸、唐津、在地産の陶磁器16点が掲載されている。
5. 歴史 本多氏は家康の側近である正信の弟正重を祖とし、1,000石の旗本から出発し、元和2（1616）年に下総国相馬郡ほか10,000石を与えられた。駿河田中に入ったのは享保15（1730）年のことで、これ以降、加村周辺は田中藩領となった。文献①には、文久3（1863）年6月「領主本多紀伊守家中仮宅長屋27棟、御殿1棟、土蔵2棟、道場1棟、表門裏町を建設して、江戸深川扇橋下屋敷の藩士を移住せしむ明治2年正月本多藩士は安房国長尾に移り、佐々布貞之允支配江戸薬研堀役所を此処に移して加村役所と称し、尋で葛飾県と改め」たとある。これには注釈が必要で、陣屋は田中藩下屋敷の移転というかたちで建設されたものの、7年後の同2年1月に葛飾県の設置に伴い、そこが県庁となった。佐々布貞之允とは明治元年下総知県事に任命された肥後藩士佐々布直武のことで、薬研堀に仮役所が置かれた。なお、県設置時の権知事は矢野光儀である。

6. 関連資料および文献

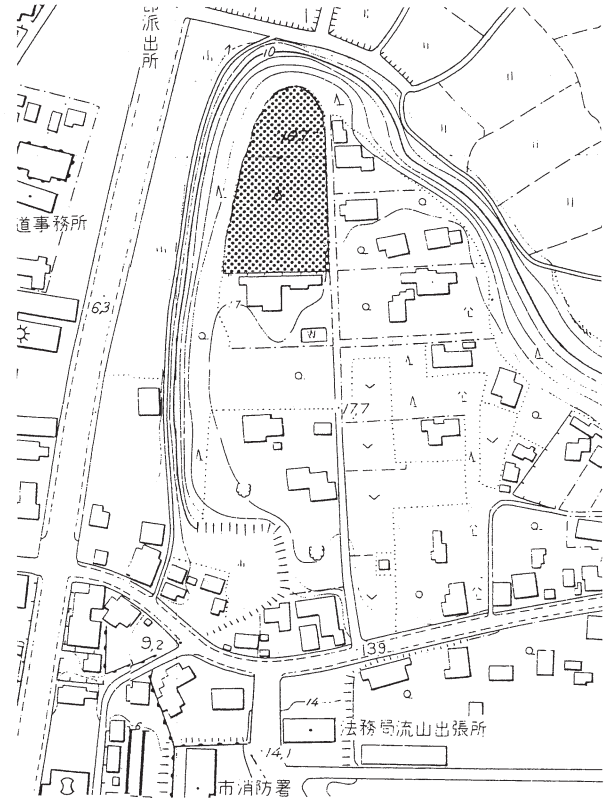
- ①千葉県東葛飾郡教育会 1923『千葉県東葛飾郡誌』
- ②下津谷達男ほか 1978『加村台遺跡－1976年度発掘調査報告書－』流山市教育委員会
- ③藪原敏史 1990「本多下総領の成立について」－「本多四公日記」と「家譜」の紹介をかねて－『鎌ヶ谷市史研究（第3号）』鎌ヶ谷市教育委員会
- ④今枝茂太 1988「田中本多藩史抄」『流山研究におどり』第2号 流山市郷土資料館友の会

7. 関連資料

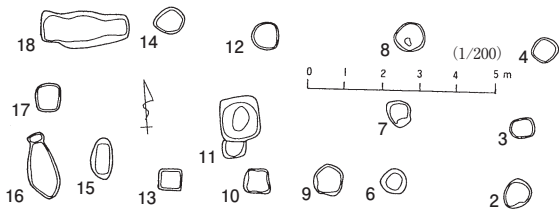
①「流山町加村台本多紀伊守仮宅後葛飾印旛県庁」図（『千葉県東葛飾郡誌』）



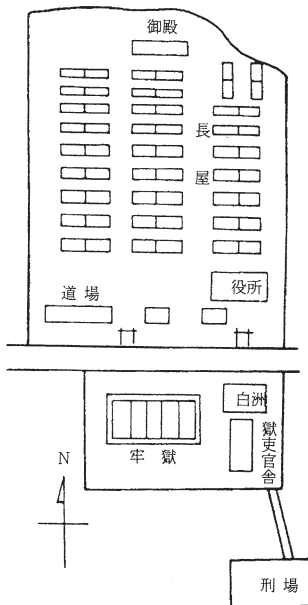
第46図 加陣屋検出遺構（文献②）



第45図 加陣屋調査範囲と周辺地形（文献②）



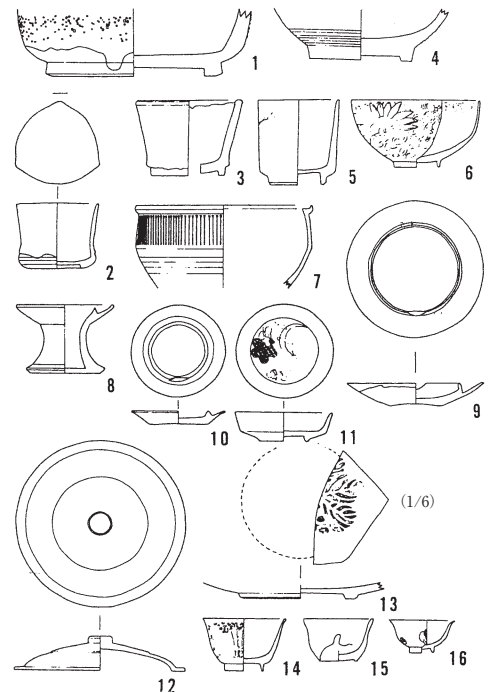
第47図 加陣屋検出建物跡（文献②）



第49図 加陣屋・県庁配置図
（流山市立博物館ふるさと探訪11）



図版43 加陣屋跡現状

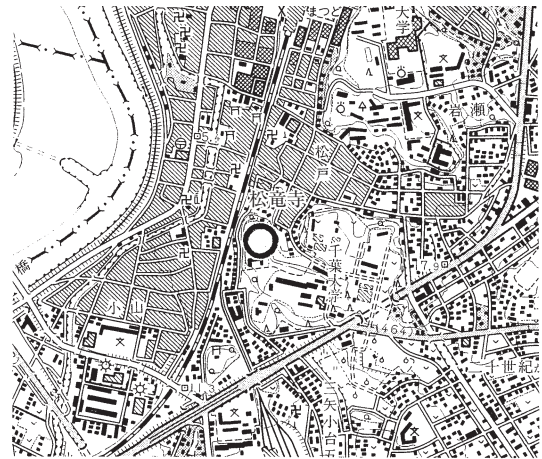


第48図 加陣屋出土遺物（文献②）

27. 【戸定陣屋】（旗本陣屋）松戸市松戸字戸定ほか／下

総国葛飾郡松戸村

- 1. 当主 高木正次—正勝
- 2. 封地 文禄3年（1594）：下総国葛飾郡内～天和3（1683）年嗣子無く断絶
- 3. 位置 文献①によれば、諸資料から字（あざ）戸定（「高木筑後守古城跡之由」）とする。ここは幕末以降徳川家が屋敷を構えたところで、周囲は市街化も進み旧状は窺えない。
- 4. 規模 高木氏は17世紀代に当地を離れてしまったためと、幕末の屋敷造成や常磐線建設により遺



第50図 戸定陣屋の位置

構は窺えない。しかし、戸城は外城の転訛と考えられている点や、台地下の松竜寺一帯が字根古屋であることなど、台地そのものが要害地（江戸川低地に西面する）に立地することと併せまさしく城跡ないし古城を取り立てた可能性が高い。なお、文化2（1805）年の松戸宿明細帳ともいべき資料①には「一字戸定 是者高木筑後守様御陣屋跡之由申伝候」とある。態々、扱ふべき「書物等は無御座」くと言っているので、伝承として遺っていたのであろう。

5. 歴史「寛政重修諸家譜」によれば、高木氏は西三河高木（現安城市高木町）を名字の地とし、永禄～天正年代に広正が出て数々の合戦に活躍したが、とりわけ三方原合戦時には乗馬が鉄炮に斃れた家康に自らの馬を奉り殿戦を務めた勇猛の士としてきこえた。正次はその次男に当たり、文禄2年、葛飾郡の内でも采地を与えられた。その後、上野国・相模国・上総国内でも加増を受け、元和9年には併せて3,300石を知行する大身旗本となった。陣屋の設置年代は不明ながら、菩提寺である松竜寺が慶長18年、正次を開基とすることや、その年に葛飾郡内に加増があったことなどから、同年に推定した。養子正勝は父の死（慶安4年：1651）と共に家を継いだが、天和3（1683）年に没し、嗣子無く断絶した。正次の石塔は松竜寺にある。

6. 関連文献

- ①松戸市 1978『松戸市史』中巻近世編
- ②松戸市 1973『松戸市史』資料編（二）

7. 関連資料

- ①文化2年「御分間御絵図御用宿方銘書上帳」（文献②所収）



図版44 戸定陣屋跡遠景



図版45 松竜寺高木氏石塔

28. 【^{こがね}小金陣屋】・【^{かねがさく}金ヶ作陣屋】（代官陣屋）松戸市殿平賀

内／下総国葛飾郡松戸村・松戸市金ヶ作字陣屋
前ほか／下総国葛飾郡金ヶ作村

1. 代官 ①小金陣屋 ^{わたぬきまさいえ}綿貫政家—^{まさしげ}政重—^{まさつぐ}政次—^{まさはる}政春—^{まさなが}正長—^{まさつね}政常—不明—^{まさよし}政好—^{まさなお}政直—^{まさゆき}政之—^{まさもと}政元

②金ヶ作陣屋 幕府代官

2. 管轄 ①（慶長年間）～幕末：小金牧・佐倉牧（享保期から小金3牧、佐倉3牧除く）

②（享保6年）～幕末：小金牧（中野牧・下野牧）

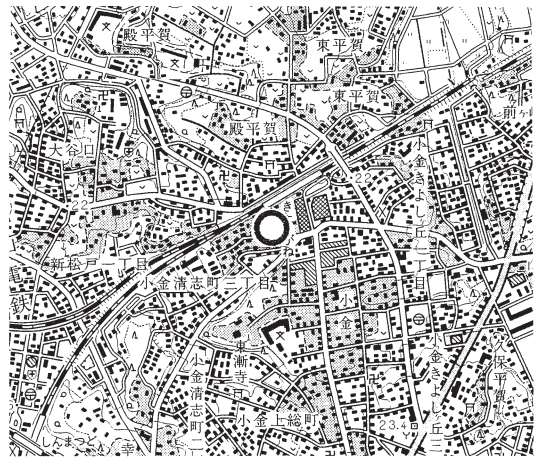
3. 位置 ①綿貫家系図（文献①）に「小金天王側旧邸廓内にあり」とあって、資料③には天王社に入口を向けるかたちで屋敷地が描かれている（「御厩御用屋敷」）。②嘉永2（1849）年の資料④には小金牧外れに矢来囲みの区画が確認される。

4. 規模 ①延宝期では2反2畝（資料①）と記されている。馬小屋、馬場も併設する。②は南北約150m、東西約200mと推定されており（文献⑦）、敷地内に役所2棟（6間×2間、7間×3間）・内厩2・土蔵（天保期資料⑤）、それに払場が設けられていた。

5. 歴史 ①綿貫氏は千葉氏の旧臣と伝え、馬方をもって仕えたが、近世にはその職掌故に下総牧の野馬奉行に任命された。陣屋といってもその実態は野馬の管理に由来する特殊技能故で、それはまさしく厩御用屋敷に相当する。②幕府代官小宮山昌世は小金5牧のうち、下野・上野両牧の野馬管理と小金・佐倉両牧の「地面」並びに御林支配（その役人を野方代官と称した）のため、享保期に小金原の一角を占める日暮村の原地（字金ヶ作）に陣屋を取り立てた。陣屋は享保18（1733）年、関東郡代伊奈氏に変わった時点で、一旦破却の命があったが（資料⑥）、そのまま後任の野方代官に引き継がれた。なお、伊奈氏以降は手代のみの出張陣屋となった。寛政期には小納戸頭取の支配下に入ったが、幕末の慶応2（1866）年、布佐陣屋の成立と共に再度関東郡代の管轄するところとなった。捕り馬の際には、臨時の普請もなされたようで、資料④には中に4棟の小屋が描かれ、「御陣屋 金ヶ作」・「壺番より四番まで勢子詰所」と注記がみられる。

6. 関連文献

- ①東葛飾郡教育会 1923『千葉県東葛飾郡誌』
- ②松戸市 1958『松戸市史料』第三集
- ③松戸市 1973・1978『松戸市史』史料編（二）・中巻近世編
- ④習志野市 1986『習志野市史』第二巻史料編（I）



第51図 小金陣屋の位置



第52図 金ヶ作陣屋の位置

⑤流山市立博物館編 1988『流山市史 近世資料編Ⅱ』流山市教育委員会

⑥大谷貞夫 1988「金ヶ作陣屋考」『鎌ヶ谷市史研究』創刊号

⑦千葉県教育委員会 2007『房総の近世牧跡』

7. 関連資料

①「下総国葛飾郡松戸村屋敷御検地水帳（文献③）」

②「小金町手鑑」（文献②史料編二）」

③幕末期小金町絵図（文献②）」

④小金原鹿狩之図（『柏市史』資料編10口絵）」

⑤「小金牧野馬諸事控」（文献③）」

⑥「金ヶ作陣屋取扱に付仰渡覚」（文献③）」

⑦金ヶ作陣屋測量図（『松戸の遺跡』）」



図版46 小金陣屋跡現状



図版47 金ヶ作陣屋跡碑



第53図 金ヶ作陣屋跡測量図（資料⑦）」

29. 【その他の陣屋】

【大須賀陣屋】（大名陣屋）（香取市松子字要害ほか／下総国香取郡松子村）

天野康景は家康の小姓から出発し、数々の合戦に従い、天正18年の関東移封時に下総国大須賀領3,000石を与えられた。慶長5年、関ヶ原の戦後処理に伴い、加増されて駿河国興国寺へ移封された（10,000石）ので、その間約11年の短い期間であった。大須賀陣屋の位置は不明ながら、中世大須賀領を継承したとすれば、大須賀氏が拠った松子城が該当する。城跡主要部は既に消滅している。測量図では南北250m・東西150m程の規模ながら、北側には外郭らしき遺構が認められる。山麓には民家が蟻集し、根小屋の名残であろうか。なお、成田市助崎城もその可能性がある。

【堀氏陣屋】（旗本陣屋）（香取市多田内／下総国香取郡多田村）

堀直重は直政の三男で、秀忠に仕え、慶長6（1601）年に下総国香取郡内に於いて2,000石を与えられ、更に慶長15（1610）年には信濃国の内にて6,000石を加増された。元和元（1615）年に12,000石を領し、信濃国須坂を居城とした。元和2年6月没、自光院壽山宗勝と諡された。堀氏が陣屋を営んだ場所は明確ではないが、直重の石塔が香取の新福寺にあること、所領がその南の新市場村、多田村、篠原村などであることから、慶長から元和期にかけて所領内に陣屋が構えられたと思われる。ところで、「寛政重修諸家譜」に矢作に於いて采地二千石と見えるのは、その当時当地を広く矢作郷ないし矢作領と呼んでいたためであろう。なお、『寛政五癸丑年六月改下総国香取郡多田村旧記并篠原村旧記』（香取五郎 1994）には多くの堀家中が確認されるが、その淵源が香取郡時代に遡るものかどうかは明らかでない。



図版48 新福寺堀直重墓所

【木間ヶ瀬陣屋】（旗本屋敷）（野田市木間ヶ瀬字正久保ほか／下総国葛飾郡木間ヶ瀬村）

現木間ヶ瀬小学校地。深津氏は代々徳川氏に仕え、正信代の寛永6（1629）年に武蔵国・下総国葛飾郡内で併せて750石を与えられた。「寛政重修諸家譜」には「寛永十年二月七日下午総国葛飾郡のうちにして、二百石を加恩あり」と見える。正信の後、正武—正直と継ぎ、正照代の元文4（1739）年、葛飾郡200石の地を武蔵・上野国内に移される。木間ヶ瀬慈眼院には正信から正直に至る当主と一族の石塔が現存し（銘文については、岩田慶順 1966『木間ヶ瀬村史稿（抄）』参照）、『千葉県東葛飾郡誌』には、「木間ヶ瀬字正久保にありて旁に累代の墓所及び陣屋跡あり」と記す。

【布佐陣屋】（代官陣屋）（我孫子市布佐字北原地ほか／下総国葛飾郡布佐村）

幕末時、幕府直轄領経営の建て直しと治安の維持を兼ね、慶応2（1866）年、関東郡代河津祐邦は下総国布佐村に陣屋を設置し、幕領の支配に当たった。その後、羽田—岡田—平岡氏と交替し、鳥羽・伏見の戦いの終わった慶応4年2月に取り壊された。『千葉県東葛飾郡誌』には「郡代邸址」として「道路を界して二方に濠址を存し、北は断崖高さ三十尺許、其の下は田圃にして利根川に接す。…」とある。

^{いづか}**【飯塚陣屋】（旗本陣屋）**（八日市場市飯塚内／下総国匝瑳郡飯塚村）

青山氏は香取郡・匝瑳郡内で3,000石、匝瑳郡飯塚村に陣屋を構えたとされるが（『八日市場市史』）、詳細は不明である。

^{かいつか}**【貝塚陣屋】（旗本陣屋）**（匝瑳市貝塚内／下総国匝瑳郡貝塚村）

永田久琢は天正18（1590）年、上総国内・下総国匝瑳郡内他4,000石を与えられ、貝塚村に陣屋を設けた。その領地は匝瑳・武射・長柄・周准4郡にわたっていたが、本貫地は匝瑳郡貝塚であった。陣屋は現宝光寺付近かと推測されるが、正確な場所は不明である。

【秋山氏陣屋跡】（旗本陣屋）（松戸市内／葛飾郡内）

徳川家康の五男万千代は武田氏を継いで武田信吉と名乗り、小金次いで佐倉へ移ったが、母は武田氏の臣秋山氏の出で、その関係により兄昌秀は下総国で1,000石を与えられた。子昌重代に上総長柄郡内ほかで4,000石の大身となり、小金に陣屋を構えたとと思われるが、その場所は定かでない。陣屋口という字名がのこる松戸神社付近であろうか。但し、当地の旗本領の変遷からして寛永期までには廃されたと思われる。秋山氏一族の墓所は松戸の本土寺にあり、大型の宝篋印塔をはじめとする石塔がまとまって存在する。



図版49 本土寺秋山氏墓所

【木曾氏陣屋跡】（大名陣屋）（匝瑳郡旭市飯岡字宿／匝瑳郡三川村）

信濃木曾谷の名族木曾氏（義昌）は天正18年、家康に従い関東に移ったが、当所は匝瑳郡網戸ではなく、現旭市三川の福蔵寺であったらしい。同寺縁起には「木曾伊豫守一萬石知行シ當寺陣屋トシテ式三年程也 県譽上人八十歳寺ニテ福蔵寺ノ行事ヲ勤之ヲ也其ノ後木曾殿網戸村屋形ヲ立テ…」（『飯岡町史史料集』第一集）とあって、慶長4年には重臣の千村氏が義昌の御影供のため糶20俵を寄進しているなど、その関連が窺える。しかし、三川と網戸とは離れており、通常その近くに仮陣屋を設けていることからして、不審な点もある。何らかの事情（例えば災害等）でもあったのだろうか。



図版50 三川福蔵寺近景

【その他】（匝瑳郡内／香取郡内）

その他として、近世初めに下総幕領を支配した吉田佐太郎の陣屋跡（現市川市相之川2丁目）、同じく近世初頭に匝瑳郡内で3,000石の菅沼定吉、香取郡内で5,000石の山本頼重などがいるが、後者についてはその陣屋地等不明である。